

アソビ

ASOBI

特定非営利活動法人サロン2002 広報誌「游 ASOBI」

2018.4 創刊号

20周年記念シンポジウム／ 年次報告／サロン2002とは

月例会・ユース世代のフットサル・リサイクルプロジェクト
ユースサッカーリーグ運営受託・スポーツを通じた国際協力



スポーツを通しての
ゆたかなくらしづくりを目指して



SALON2002



2018 APR 創刊号

目次



理事長よりご挨拶 2

20周年記念シンポジウム報告

はじめに 3

シンポジウム開催要項 4

第1部 「この20年」を語る—サロン2002のあゆみとともに 6

Jリーグ観客調査から見えるもの—「みるスポーツ」の20年 (筑波大学 仲澤 眞) 9

ファインダーから見えるもの—地域スポーツの20年 (写真家・ライター 宇都宮 徹彦) 13

インターネットの誕生と拡充—メディアの20年 (NEC マネジメントパートナー 鈴木 崇正) 16

指導現場から見えるもの—「するスポーツ」の20年 (筑波大学附属高校 中塚 義実) 22

指定発言者より 27

第2部 「これから」を語る—2020年を越えて 30

配布資料 41

シンポジウム参加者一覧 44

参加者アンケート 45

シンポジウムにご支援いただいた方々 45

寄稿編 46

観戦ツアーの20年 (株式会社セリエ 徳田 仁) 57

サッカーをめぐる冒険～新たなビジネスモデルを求めて (日伊協会 湯浅 浩志) 46

「サロン2002」との出会い、そして2020年以降を見通した強力で持続可能な競技力強化のための支援体制の構築について
(スポーツ庁競技スポーツ課課長補佐 川井 寿裕) 53

プロサッカーもワールドカップ出場も「当たり前」のBefore 20とAfter 20 (筑波大学蹴球部OB 春日大樹) 50

私たちの取り組み (年次報告)

I. 月例会報告 (第245回 (2017年1月)—第257回 (2018年1月)) 63

II. 各事業の報告

1. Gavic Cup ユースフットサル選抜トーナメント2017 87

2. U-18 フットサルリーグチャンピオンズカップ2017 90

3. U-18 フットサルリーグチャンピオンズカップ2018 96

4. リサイクルプロジェクト/スキンプロジェクト 99

5. 「DUO リーグ」事務局 (業務受託) 100

6. SPORT FOR TOMORROW 事業への参加 101

NPO サロン2002とは

公開シンポジウム (2017年1月月例会) 103

U-18 フットサル (2017年3月月例会) 115

月例会 (2017年5月月例会) 131

入会案内 145

発刊にあたって

今年から特定非営利活動法人サロン 2002 は、toto の助成を受けて広報誌を作成し、わたしたちの“志”である「スポーツを通してのゆたかなくらしづくり」を、誌面を通してお届けすることとなりました。

その名称から想起されるように、わたしたちのNPOは2002FIFAワールドカップ前からあった、サッカー好きの若者の研究ネットワークがはじまりです。「サロン 2002」の名称は1997年度から用いており、2017年はちょうど20周年となります。

20年も経過すると、はじめたころの若者はみな、いい年齢になっています。そしてサロン 2002 が歩んだ20年は、日本のサッカー界・スポーツ界はもちろんのこと、日本と世界の社会環境は大きく変化し、人々の意識や日常の生活習慣も大きく変わりました。

毎年開催する公開シンポジウムでは、サロンがあゆんだ20年を「Before2002 After2020」と題して、さまざまな角度から振り返りました。単なる思い出話だけでなく、いまにどうつながり、これからどこへ向かっていくのかを考えるよい機会となりました。この広報誌にはシンポジウムの内容が網羅されるとともに、寄稿編として4名の方から貴重な証言をいただいています。

サロン 2002 の中心的な活動である月例会は、2017年6月で通算250回となりました。毎回テーマはユニークで、参加者は多種多様です。広報誌には月例会報告のダイジェスト版が掲載されていますので様子がおわかりいただけるでしょう。興味を持って下さった方は、ぜひホームページをご覧ください。ダイジェスト版でなく、読み応えのあるフルバージョンの報告が掲載されています。広報誌にはフルバージョンの月例会報告が3件掲載されています。サロン 2002 の各事業－公開シンポジウム、U-18 フットサル、月例会－について取り上げたもので、わたしたちのNPOをご理解いただくうえで有益となることでしょう。

任意団体のころ、わたしたちはなかなか事業主体になりきることができませんでした。そこにもどかしさもありました。2014年度からNPO法人となり、“志”に沿ったさまざまな事業に積極的に取り組むようになりました。広報誌には、toto 助成を受けて主催した「U-18 フットサルリーグチャンピオンズカップ」の報告もあります。また、「スキプロジェクト」や「オリンピック教育」の事業報告もあります。Sport for Tomorrow コンソシアムの一員として、これからも国内外の様々な活動に取り組んでいく所存です。

はじめての広報誌です。ぜひ手に取ってお読みください。

そして、「スポーツを通してのゆたかなくらしづくり」という“志”に賛同していただけるなら、まずは「スポーツネットサロン 2002」のメンバーになりませんか？

2018年3月1日

特定非営利活動法人サロン 2002 理事長

中塚義実



サロン2002 20周年記念シンポジウム

Before2002 After2020

スポーツを通しての“ゆたかなくらしづくり”を目指して

特定非営利活動法人サロン2002は、スポーツを通しての“ゆたかなくらしづくり”を“志”とするNPOです。2002FIFAワールドカップの前からはじまる私たちの活動は、今年で20年を迎えます。それを記念して、サロンがあゆんだ20年を取り上げ、日本スポーツの現代史と「これから」について語る公開シンポジウムを開催しました。

2019ラグビー・ワールドカップ、2020東京オリンピック・パラリンピックと、この先に大きなイベントが続きます。2002年のときもそうでしたが、私たちの関心は、2020の先に何を残すかにあります。

本シンポジウムでは、第一部でJリーグ発足を契機とする日本スポーツの構造改革、インターネットの普及に象徴される社会環境の変化、そしてグローバル化とローカル化などを切り口として「この20年」の変化を振り返ります。そして、第二部で、スポーツを通じたゆたかなくらしづくり”に向けて、「これから」につながる 様々な取り組みについて語りあいます。

シンポジウム運営 安藤 裕一 大河原 誠二 川名 紀義 岸 卓巨
菅原 勉 嶋崎 雅規 遠山 諒 中塚 義実
本多 克己



サロン2002 20周年記念シンポジウム

Before2002、After2020

ースポーツを通しての“ゆたかなくらしづくり”を目指してー

特定非営利活動法人サロン 2002 は、スポーツを通しての“ゆたかなくらしづくり”を“志”とする NPO です。2002FIFA ワールドカップの前からはじまる私たちの活動は、今年で 20 年を迎えます。それを記念して、サロンがあゆんだ20年を取り上げ、日本スポーツの現代史と「これから」について語る公開シンポジウムを開催します。

2019 ラグビー・ワールドカップ、2020 東京オリンピック・パラリンピックと、この先に大きなイベントが続きます。2002 年のときもそうでしたが、私たちの関心は、2020 の先に何を残すかにあります。本シンポジウムの第1部では、Jリーグ発足を契機とする日本スポーツの構造改革、インターネットの普及に象徴される社会環境の変化、そしてグローバル化とローカル化などを切り口として「この20年」の変化を振り返ります。そして第2部で、2019 ラグビー・ワールドカップ、2020 東京オリンピック・パラリンピックを中心に「これから」につながるさまざまな実践を取り上げます。

シンポジウム終了後は同会場で懇親会を企画しています。さまざまな立場の方が集い、立場を越えて交流を深める場となることを願っています。

「この20年」を振り返りつつ、夏のひとときを多くの方と、夢のある話で過ごせることを願っています。

特定非営利活動法人サロン2002

理事長 中塚義実

記

主催：特定非営利活動法人サロン 2002
日時：2017(平成 29)年 8 月 27 日(日) 14:00~17:00 (受付 13:30~)
会場：桐蔭会館

〒112-0012 東京都文京区大塚1-9-1(筑波大学附属中学・高校 敷地内)
東京メトロ 有楽町線 護国寺駅 5 番出口より徒歩 8 分
東京メトロ 丸ノ内線 茗荷谷駅 より徒歩 10 分

概要：

第1部 「この20年」を語るーサロン 2002 のあゆみとともに

仲澤 眞(筑波大学) Jリーグ観客調査から見えるものー「みるスポーツ」の20年
宇都宮 徹彦(写真家・ノンフィクションライター) ファインダーから見えるものー地域スポーツの20年
鈴木 崇正(NEC マネジメントパートナー) IT 技術とスポーツの変遷ーネットメディアの20年
中塚 義実(筑波大学附属高校) 指導現場から見えるものー「するスポーツ」の20年

第2部 「これから」を語るー2020 を越えて

2019 年ラグビーワールドカップ、2020 年東京オリンピック・パラリンピックを主な題材として、“スポーツを通じたゆたかなくらしづくり”に向けた様々な取り組みについて語りあいます。

参加費：2,000円(ただし学生は無料) ※懇親会参加費は3,000円(学生1,500円)程度を予定

参加者特典：シンポジウムに関連する内容であれば、ご自身の所属団体の関係資料を配布できます。
シンポジウム記録を含む、サロン2002広報誌が無料で郵送されます。
スポーツを通じた地域振興の実例を聞くことができます。
サッカーW杯、ラグビーW杯、オリンピック・パラリンピック関係者と直接交流ができます。

参加申込：下記アドレスからご登録ください

<https://goo.gl/z6m3B8>

事務局：salon2002.info@gmail.com(担当：遠山)

＜特定非営利活動法人サロン 2002 とは＞

特定非営利活動法人サロン 2002 は、スポーツを通しての“ゆたかなくらしづくり”を“志”とする NPO です。

全国各地にいる約 100 名のメンバーは、学校関係者、スポーツ指導者やトレーナー、スポーツクラブの運営に携わる方、フットサルや草サッカーの関係者、メディア関係者、サポーターやボランティア、スポーツ行政に携わる方や競技団体関係者、医者や弁護士、アーティストなど多種多様です。さまざまな角度からスポーツに携わり、“志”の実現に向けて活動する者で構成されるのが「サロン 2002」です。

NPO 法人サロン 2002 の主たる活動は、2017 年 6 月に通算 250 回となった月例会の開催と、その内容を軸とするホームページの運営です。本公開シンポジウムは 2001 年度よりほぼ毎年行われ、人と情報の行き交う場として定着しています。

詳細はホームページ <<http://www.salon2002.net>> をご覧ください。

＜サロン 2002 公開シンポジウム＞

2001 年度…FIFA コンフェデレーションズカップ総括
2002 年度…FIFA ワールドカップ総括
2003 年度…地域で育てるこれからのスポーツ環境
2004 年度…totoを活かそう！
2005 年度…クラマーさん、ありがとう！
2006 年度…2006 年ドイツで感じたこと
2007 年度…サッカー観戦を楽しもう！-スタジアム編
2008 年度…地域からみたJリーグ百年構想
2009年度…2019年ラグビーワールドカップを語ろう！
2010年度…育成期のサッカーを語ろう！
2011年度…高校サッカー90年史を語ろう！
2012年度…U-18フットサルを語ろう！
2013年度…スポーツクラブの法人化を語ろう！
2015年度…スポーツで“ゆたかなくらし”を！
2016年度…日本サッカーのルーツを語ろう！

サロン 2002 設立宣言

(2000 年 4 月 1 日)

我々は、以下に「サロン 2002 の“歴史”」、「サロン 2002 の“志”」及び「サロン 2002 の“会員”」を述べることに
より、ここにあらためてサロン 2002 の設立を宣言する。

【サロン 2002 の“歴史”】

サロン 2002 は、社会学、心理学等の専門的立場からサッカーの分析・研究・報告に従事していた「社・心グループ」(財団法人日本サッカー協会科学研究委員会の研究グループの一つで、1980 年代後半からこの名称で活動)を前身とし、1997 年からは研究者という枠にとらわれない、幅広い人材によって構成されるゆるやかな情報交流グループ「サロン 2002」として活動を行ってきた。

【サロン 2002 の“志”】

サロン 2002 は、サッカー・スポーツを通して 21 世紀の“ゆたかなくらしづくり”を目指すことを“志”とする。年齢、性別、国籍、職業、専門分野、生活地域などを超えた幅広いネットワークを築き上げ、全国各地にサロン 2002 の“志”の輪を広げ、大きなムーブメントとなることを目指す。

サロン 2002 の“志”を実現する上で、2002 年 FIFA ワールドカップ韓国／日本大会は大きな節目であると認識する。国内外の様々な人々と協力しながら、この世界的なイベントの“成功”に貢献するとともに、同大会後の“ゆたかなくらしづくり”のためにできることを考え、行動する。

【サロン 2002 の“会員”】

サロン 2002 は、前項の“志”を同じくする人たちのゆるやかなネットワークである。

サロン 2002 の“志”に賛同した個人であれば、誰でも、“会員”となることができる。ただし会員は、サロン 2002 からの“Take”を求めただけでなく、サロン 2002 に対して、また社会に対して何が“Give”できるかを常に考え、“Give and Take”の姿勢でいるということが前提である。

サロン 2002 は、会員に対して短期的な成果は求めない。長い目で見た“Give and Take”の関係が成り立っていればよい。即座のアウトプットが困難であっても、いずれ何らかの形で“Give”を考えている人なら“会員”となることができる。



第1部「この20年」を語る — サロン2002のあゆみとともに

笹原 サロン2002 20周年記念公開シンポジウム before2002 after2020にお越しいただきまして誠にありがとうございます。NPO法人サロン2002の副理事長の笹原勉です。今日は司会を務めさせていただきます。

活動自体はもう少し古いんですけども、サロン2002という名称を使い始めて今年で20年というこ



とで今回の20周年シンポジウムを開催させていただきました。まず、第1部「この20年」を語る-サロン2002のあゆみとともに、の演者の紹介です。まず筑波大学体育系准教授の仲澤眞さん。それから写真家でありノンフィクションライターである宇都宮徹一さん。NECマネジメントパートナーのシニアエキスパートである鈴木崇正さん。NPO法人サロン2002の理事長であり、筑波大学附属高校の教諭である中塚義実さん。

その後休憩をはさみまして第二部は「これから」を語る-2020を超えて、という題で2019年のラグビーワールドカップ、2020の東京オリンピック、パラリンピックの話題を中心として多くの方々に登壇していただいてスポーツを通じた豊かなくらしづくりについてお話していただきます。

中塚 皆さんこんにちは。サロン2002の理事長を務めます中塚です。毎年公開シンポジウムをやっている

ますが20周年記念シンポジウムは20年に一度です。まずは、この20年どんなことがあったのか、サロンがどのように変わってきたのかをおさらいさせてください。一人の人間が成人するぐらいの年代なので、その間に世の中も大きく変わっております。

そもそも我々のネットワークは、当時あった日本サッカー協会科学研究委員会で社会調査などを行っていた、社会学や心理学に興味を持つ研究者の活動からスタートしています。お茶の水女子大の研究室に定期的に集まっていました。

80年代の終わりごろからサッカー界に劇的な変化がやってきます。まずは皆さんご存知のJリーグ。当初はJリーグという名前もなかったのですが、とにかくプロサッカーができるということは大きなインパクトがありました。そして2002年のFIFAワールドカップの招致活動。こうした大きなうねりの中で、社会学や心理学に興味を持つ研究者の会合に、仕事としてサッカーにかかわろうとする人など、いろいろな分野の人たちが参加するようになりました。さらにフットサルの誕生があります。これは94年からFIFAの音頭で正式競技となり、「するスポーツ」の世界の様子もずいぶん変わってきます。さらに、今日の鈴木さんの話とも関係しますが、ちょうどこのころからインターネットが普及し、手紙や葉書でなく、ボタン一つで全国各地の人が繋がるようになりました。全国の人とのネットワークが確立し、ただ繋がっているだけじゃつまらないなど思っている人が、フットワークよろしくここに集まり、顔を突き合わせながら飲み食いする。そのような形で研究会の性格が変わってきたところで、名称を「サロン2002」としてスタートしたのが1997年度。それから数えて、今年で20年ということです。

スライドには2013年度の状況が書かれていますが、当時は全国に180名のメンバーがいて、毎月開かれる月例会はもちろん、かなり活発にいろんなことに取り組んでいました。その中の一つが年一度の公開シンポジウムです。去年は、この同じ場所で「日本サッカーのルーツを語ろう」というシンポジウムを開きました。

また「出張サロン」と呼ぶ活動もあります。全国各地にサロンのメンバーがいますので、そこへお出かけし、地元の方々とはさまざまな形で交流を図るというものです。「合宿」と称して、自分たちで勝手に出かけたこともあります。伊豆の今井浜で合宿をやったのは懐かしいですね。2006年にはついに海外へ進出。

サロン2002のあゆみ

JFA科学研究委員会のサブグループ「社・心グループ」が前身
(1980年代後半から定期的に活動)

- ◆サッカー界の劇的変化
 - ・Jリーグ発足
 - ・2002年FIFAワールドカップ招致活動～開催
 - ・フットサルの誕生
- ◆インターネットの普及
 - ・全国各地の“同志”がネットワーク化
 - ・「ネットワーク」を「フットワーク」につなげるマイルドと活動

「サロン2002」としてリスタート(1997年度)
2000年度より、会員制導入(一口会員は3,000円。それ以上を定める)
2010年度より、会費は3,000円/年(それ以上は寄付金扱い)
2013年度には、全国に約180名の会員が
主な活動は、月例会、公開シンポジウム、(いわゆる)出張サロン等

サロン2002 公開シンポジウム

- ・ 2001年度 ... FIFAコンフェデレーションズカップ総括シンポジウム
「2002年とその先へのメッセージ」
- ・ 2002年度 ... FIFAワールドカップ総括シンポジウム
「ささる物語」「観戦と交流の物語」
- ・ 2003年度 ... 2002年を越えて
「地域で育てるこれからのスポーツ環境」
- ・ 2004年度 ... totoを活かそう!
- ・ 2005年度 ... クラマーさん、ありがとう!
- ・ 2006年度 ... 2006年 ドイツで感じたこと
- ・ 2007年度 ... サッカー観戦を楽しもう! ユースタム編
- ・ 2008年度 ... 地域からみたJリーグ百年構想
- ・ 2009年度 ... 2019年W杯ワールドカップ日本大会を語ろう!
- ・ 2010年度 ... 育成期のサッカーを語ろう!
- ・ 2011年度 ... 『高校サッカー90年史』を語ろう!
- ・ 2012年度 ... U-18フットサルを語ろう!
- ・ 2013年度 ... スポーツクラブの法人化を語ろう! ※2014年度は開催せず
- ・ 2015年度 ... スポーツで“ゆたかな暮らし”を!
- ・ 2016年度 ... 日本サッカーのルーツを語ろう!

いわゆる「出張サロン」-サロンin●●

(1996年度の伊豆今井浜、1997年度の「丸の内」は「合宿」)

- ・ 1998年度 ... 鹿島
- ・ 1999年度 ... 新潟、掛川
- ・ 2000年度 ... 新潟
- ・ 2001年度 ... 清水、神戸
- ・ 2002年度 ... 刈谷、(神戸=シンポジウム)
- ・ 2003年度 ... 大分、(両国=お出かけ)
- ・ 2004年度 ... 伊香保、成岩
- ・ 2005年度 ... 名古屋
- ・ 2006年度 ... フランクフルト
- ・ 2007年度 ... 高知
- ・ 2008年度 ... 岡山、金沢、那智勝浦 → 行き過ぎ!
(2009年度の川崎「お出かけ」、2010年度の堺はシンポジウム、2011年前はなし)
- ・ 2012年度 ... 大分白杵、(名古屋=シンポジウム)
(2013年度以降、一時見合わせ。豊田区での「お出かけ」は御座りません)
- ・ 2017年度 ... (品川=お出かけ) (ほか調整中)

サロン2002の“これから” -2013年4月例会資料(一部改稿)

- ◆事務局機能を強化したい!
“プロ意識を持ったボランティア”と、“ボランティア精神を持ったプロ”で運営してきたが、いまのままだと、現状が限界。いま以上を求めるなら、事務局機能の強化は不可欠!
(“中塚個人商店”の限界)
- ◆組織としての姿がみえるようにしたい!
・他の組織と連携を図る際、法的にも対等の姿で対応したい。
「いったいあなた方は何者ですか?」に答えられるように
・補助金等の受け皿となれるようにしたい。
- ◆事業の担い手としての“サロン2002”となっていきたい!
・月例会、公開シンポジウム、出張サロンなど、これまでやってきた事業は継続する
→より規模を拡大して実施できる
・“ゆたかな暮らし”を志向する良い活動の担い手になりたい
例)DUIリーグの事務局をサロン2002が担う → 可能か?
例)リサイクルプロジェクト「スキッププロジェクト」を担う → 可能か?
例)オリンピック教育「U-18フットサル」を他の機関と連携して進める → 可能か?

法人化にいつ踏み切る? → いまでしょ! → 2014年5月NPO法人化

20周年記念シンポジウム「Before2002 After2020」第1部

FIFAワールドカップが開かれていたドイツ・フランクフルトで出張サロンを開きました。ただの飲み会とクラブ視察です。そしていまに至ります。

これらの活動は「中塚個人商店」のような形でやってきましたが、どうあるべきかについては、この20年で何度も検討を重ねてきました。スライドは2013年4月の時点での問題提起です。いまのままではいかん。まずは事務局機能を強化したい。それから、例えばtotoの助成金をもらいたいといっても単なる任意団体じゃだめだ、組織としての姿が見えるようにしたい。そして、ただ単に話をして盛り上がるだけでなく、事業の担い手になっていきたいというところから法人化の話になり、2014年5月にNPO法人として再出発しました。

その後どうなっているかというと、従来のネットワークはそのまま継続、そのネットワークを維持し、拡充していくことを担うNPOがあるというイメージです。そしてスポーツを通しての豊かな暮らしに貢献するよういろいろな事業に、NPO法人として責任を持って取り組んでいます。これからもこの“志”を実現する仲間を広げていこうということを考えている次第です。

ではここからは、さまざまな角度から20年を振り返っていきます。まずは、なんといってもJリーグ。最初の演者の仲澤さんと私は大学の同期生です。しかも仲澤、中塚で、あいうえお順の出席番号も近く、体育実技も同じクラスでやっていた仲間です。部活は異なりますが同じ研究室に属し、社心グループのころからJリーグの観客調査をはじめ、現在に至ります。☑

NPO法人化以降のサロン2002

- ◆従来のネットワークはそのまま継続
従来のスポーツ文化ネットワークサロン2002は、NPO法人サロン2002が運営するネットワーク。3月発足のスポーツを通しての“ゆたかな暮らし”を主に担う同志のネットワークとして、全国に約100名のメンバーがいる(うちNPO会員は約50名)。※法人化の際に離れていった人も...徐々に復帰
- ◆NPO法人としてさまざまな事業に取り組む
同志がつながるネットワークの拡充
・月例会は6月で通算250回、公開シンポジウム含む。サロン2002のコア事業として継続。
・toto助成金を受け、「U-18フットサルリーグチャンピオンズカップ」を主催。
・SFIコンソーシアムの一員として、オリイラムプロジェクトに関わる。
・「カーペルタン」基幹ユースフォーラムなど五輪教育の担い手となる。
・DUCリーグの事務局を受託。スキッププロジェクトにも取り組む。
・その他
- ◆「これから」の可能性と課題
ースポーツを通しての“ゆたかな暮らし”を目指して
・“ゆたかな暮らし”を志す良い活動の担い手となりたい
・中塚理事長の“個人商店”からの脱却を！ーbu事務局への負担増。担い手募集中！



「Before 2002 After 2020」 Jリーグ観客調査から見えるもの —「みるスポーツ」の20年

仲澤 眞 (筑波大学体育系准教授)



ファンコミュニティ、スポンサー、メディアの変遷

今日の機会にこの20年流れをレビューしたいと思います。いまは「観客調査」とは言わずに「スタジアムサーベイ」などと称されていますが、今日の「レビュー」にとっては重要な言葉と思いますので「観客調査」とさせていただきます。

この20年を端的に示すならば、「好きな人、観たい人はどうぞ」というリーグの運営が、だんだんと「客商売(きゃくしょうばい)」視線が加わり、顧客満足に向けた努力をしていく大きな流れがあります。一方で、J2、J3とリーグが広がりをもつなかで、「お客さんの方で自発的に、主体的に楽しんでください」というような、お客側の楽しむ力を育むような運営の流れができてきています。

もうひとつ、2007シーズンから2008シーズンあたりなのですが、リーグはスタジアムの滞留時間を意識し始めました。もし、観戦者にとってスタジアムが遠くにあっても、長くいることができれば移動抵抗が相対的に小さくなる。できるだけスタジアムに長くいてくれれば商圈が大きくなるということで滞留時間に着目する流れが生まれました。

最近では、観戦者とチームとの心理的な結びつきを強くする運営という基本的な流れに加えて、観戦者とチームが結びつく確率が高くないことを背景に、目標のハードルを下げて、観戦者とファンのコミュニティとの結びつきを生み出そうという、ゆっくりまったりつながるようなプラットフォームを作っていくような流れが出てきています。代表例である松本山雅のケースなども後ほどご紹介したいと思います。

あとはCSR系のスポンサーの流れにも触れたいと思います。明治安田生命はJ3までカバーしていますが、J2やJ3ではいわゆる広告効果を確認するのはな

かなか難しいものがあります。そうしたときに、何を根拠に文化支援、社会貢献としての社内の予算を取るのか、そうした根拠を作るという動きが盛んになっています。支援の意図をCSRとしたスポンサー企業への対応は今日的な課題になっています。

ソーシャルメディアとテクノロジーの発展により、メディアとライブの融合という流れもあります。昨日レイソルの試合に行っていたのですが、隣で見ていた院生は両手にスマホを持っていて、片方はDAZN専用で他会場の試合を観られるようにしてるんですね。目の前でレイソルがプレーをしているのに何をしているんだろう、落ち着かない子だなあ、と思ったんですが、ヴィッセルの試合を交えながら、SNSで器用に仲間とつながっている。ライブとメディアがこういう風に融合するパターンもあるのかと思いました。

現在の入場者数は年間1,000万人超

1992年から観客調査をスタートしまして、その年の秋、上智大学で開催されたサッカー医科学研究会でこのサロン2002の前身である社心グループとして報告をしました。この観客調査について初めて取材をいただいたのが朝日新聞でしたが、そのころは「サッカー場に女性がいる」ということで取り上げられました。最初の調査対象であったナビスコカップで「一つの大会の会期中に、お客さんってこんなに変わるんだあ」という調査の醍醐味、いわば社会調査の原体験のようなものを経験しました。

リーグはその後、流行語大賞にもなった「Jリーグ現象」なる大ブームを経験し、あとは、バブル崩壊の影響を受け、身の丈に誤解のあったクラブを中心にいろんな失敗をしながらも観客数は1997~2000シーズンで低迷します。その後、日韓共催W杯の新規施設効果やメディア露出の拡大もあり、2001シーズンは前年比の5割増しになり、東日本大震災の影響を受

けながらも5割増し水準を維持しています。直近の実績では、1試合平均1万8000人と、1試合平均2万9000の野球にはまだ及びませんが、一定の規模を超えた数字が出てきています。また、リーグは2007から年間入場者数1,100万人を目標とするイレブンミリオンプロジェクトに取り組み、今ではJ3まで含めて年間に1,000万人を超える入場者を集めています。

勝てなくても顧客満足を上げ、スポンサーの支援を継続してもらうための試み

先ほど「観たい人はどうぞ」というところから、「顧客満足を考えていこう」という流れがあったとお話しましたが、この流れは最初のJリーグブーム、Jリーグ現象のところで大きく芽生えました。サッカーがよくわからない人にも、とにかくそこに来てもらい、再び来てもらうにはどうしたらいいかと考えると、そこには保険をかける必要がある。いい試合というのは必ずあるわけではないので、「試合はうまくいなくても満足して帰ってもらうべく頑張る」という方向で、これを拡大製品といいます。

こちらのスライド(図1)はこの13日(2017年8月)、フロンターレで『なかよし』(講談社の月刊少女コミック誌)と組んでかなり違った客層を楽しませた

例です。ここにブースがありまして、選手と密着した構図で「なかよし」の表紙となったような写真を撮影できるというもので、ちょっと異様な光景でしたが、まさに拡大製品です。アニメの描き方教室やヘアアレンジメントのサービスもありました。

このような試みを含む、Jリーグクラブの顧客対応の評価については、2007年よりリーグによって、継続的に収集されています(日本プロサッカーリーグ・筑波大学共同研究)。過去10年あまりの評価データを回帰分析すると「スタジアムの雰囲気」や「スタッフの対応」など要所となる項目は、一つひとつ向上していることがわかります。J1およびJ2全クラブからのデータでは、一部には不連続な傾向はありますが、顧客満足は年々、向上しています。

勝者はいつも1チームで、必ず勝てるとは限りません。そこで、もう一つの大きな流れとして、そんなにいい成績でなくても地域に尽くしていればお客様も応援してくださるということで、そういう社会志向のベクトルでの努力も進んでいます。

このスライド(図2)はクラブが果たす社会的機能の評価に関する調査項目の結果です。クラブが地域における役割を理解したときに、自己満足ではなく、地域からの評価が向上します。先シーズン、レノファ山口がJ2に昇格し、この社会的機能の評価がかなり



図1 フロンターレの拡大製品企画(2017年8月13日仲澤撮影)

向上しました。その際、レノファがなぜこのように上がってくるのか、いろいろな議論がありました。重要な点は、レノファが社会貢献活動をしているということを知られているかどうか、ということでした。知られているので、ファンはポジティブに評価します。さらに、そうなると、スポンサーに対するファンの感謝の念も強くなっているというデータもあります。

強調したいのは、ビッグクラブ等、ファンが多く、メディア露出も多く、財務構造の良好なクラブにおいては、宣伝広告の費用対効果がよいために、スポンサーが付きますが、J2の多くやJ3などのそうでないところ、さらに一般化すれば、マイナースポーツやグラスルーツにおいて、どのようにスポンサーを集めるかという、CSR系スポンサーへの対応が課題になっているということです。企業にとってのスポンサーメリットは、宣伝してすぐさま収益を上げたい、売り上げにつなげたいという短期的なものがある一方で、社会貢献によって企業のブランド価値を上げたり、公益的な活動をする企業に従事する人たちの帰属意識を高めたり、企業の魅力がいい人材を集めたり、離職率を下げたり、など、中長期的な取り組みが最終的には売り上げや収益性の向上につながるというものがあります。そうした中長期的な投資を、どうしたらスポーツに持ってくることができるか、その投

資の効果をどのように確認するかということで、例えば、そうした支援を受けているスポーツに関わる人々における「スポンサーへの感謝の念」を高める、高めるために、ステイクホルダーへの「CSR認知の向上」を図っていくといった工夫が必要になります。

フットサルの全日本選手権のメインスポンサーはかつてP社でしたが、その支援活動に関する結果をみると、「文化・スポーツ活動の支援に熱心である」という評価が高く、「よい広告活動をしている」という評価が低くなっています。勝ち上がったチームが集う代々木体育館ではP社のショーケースみたいになっていますから、そこだけ観に来たお客さんは「よい広告活動をしている」ということになるのですが、地域の予選などから観てる人には「全然宣伝にならないのにP社ってよくやってくれるな」という理解になります。そして、P社の公益的な支援の姿勢を評価するようになり、このようにスポンサー企業の慈善的態度に関わるスコアがかなり上がっています。マイナーなスポーツにおいて「広告効果だけではスポンサーが取れない」という課題に対しては、このようなデータが必要になります。

あとはスポンサーと大会がフィットしているか(スポンサーイベントフィット)。例えば、このスライドはU社が支援する未就学児対象のサッカーイベント

Jリーグの社会的機能の評価(2016)

	総合	Jリーグクラブは、それぞれのホームタウンで重要な役割を果たしている	ホームクラブはホームタウンで大きな貢献をしている	サッカーは、若い人たちの生活に、いい影響を与えることができる	サッカー選手は、社会の模範として重要な役割を果たしている
1	広島 SANFRECCCE	広島 SANFRECCCE	川崎F	山口 RENOFA YAMAGUCHI FC	広島 SANFRECCCE
2	松本 JANGSIAEc.	川崎F	松本 JANGSIAEc.	広島 SANFRECCCE	松本 JANGSIAEc.
3	山口 RENOFA YAMAGUCHI FC	松本 JANGSIAEc.	広島 SANFRECCCE	松本 JANGSIAEc.	山口 RENOFA YAMAGUCHI FC
4	川崎F	山口 RENOFA YAMAGUCHI FC	山口 RENOFA YAMAGUCHI FC	鳥栖	鳥栖
5	鳥栖	鹿島	鹿島	鹿島	磐田
6	鹿島	鳥栖	鳥栖	福岡	熊本
7	札幌	新潟	札幌	水戸	湘南



図2 クラブの社会的機能の評価 (Jリーグ, 2016)

なのですが、このような尺度を使用するとスポンサーへの感謝の念や、スポンサーイベントフィットが上がるのがわかります。

ファンがつながるプラットフォームを意識した運営を

次には、プロシューマー (prosumer) という言葉を紹介します。例えば、観戦者は「消費者 (consumer)」としてサービスを買う立場にありますが、一方で、スタジアムにおける時間・空間を一緒に創り出していきます。その意味では「生産者 (producer)」でもあります。トフラーは「文化の消費者」は、文化の担い手としての責務から、よりよい文化を創り出していくための消費者と生産者との側面があるとしました。スポーツファンは、そこからの造語、まさに生産消費者 (prosumer) としての性格を持ちます。この生産消費者をいかに育てていくか、ということも昨今のクラブの課題になっています。今までは、チームとの心理的な結びつき (team identification) が強ければ、たとえ降格しても、2部でも3部でも好きなチームだから観に行くということが起こっていました。しかし、チームとの心理的な結びつきの効用には限界も指摘されています。またチームとの心理的な結びつきの強いコアファンの排他性にも気を配らなければいけません。コアファンのつながりが強すぎて、新規のファンが結びつきにくいといった問題です。一方で、チームとの心理的な結びつきが勝敗とか価格感受性が低下するというメリットにもなります。

そのことに関連して、チームとの結びつきだけでなく、他の観戦者との結びつき (fan community identification) が重要であるというデータが出てきています。チームと個々の人たちが結びつく (team identification) のも重要なのですが、もう一つ、ここに乗り物 (公共交通機関) のようなプラットフォームを設けるのです。コアサポというと、ゴール裏の集会があり、そこで気合を入れていかないといけないというイメージがありますが、観戦者にはグダグダな人たちもいますし、マったりしたい人もいます。でもそのグダグダさが、まったり感として人とをつないでいく、そんなプラットフォームがあると、サッカーやクラブのことがあまりわからなくても、ファン同士が簡単につながっていくことができるんですね。また、チームとの心理的な結びつきが早く育つということもあります。松本山雅などがその好例かと思えます。

さらに、ファンのコミュニティを持っている人ほど滞在時間が長いこともわかっています。滞在時間が長いといろんないいことが起きます。クラブのサービスによって滞在時間を長くさせるとなると費用対効果の問題が出てきますが、コミュニティを持つ人たちは、クラブの支援なく、スタジアムで集うことが目的だったりします。クラブの負担は小さなままで、滞在時間を延ばせるのです。ファンのコミュニティそのものが観戦の魅力になっている。

簡単に20年を振り返ると今お話ししたような流れがあったのでは、ということで時間になってしまいました。あとはディスカッションのところで補足させていただきます。ご静聴いただき、ありがとうございます。

5



「ファインダーから見えるもの —地域スポーツの20年—」

宇都宮 徹壺 (写真家・ノンフィクションライター)



ワールドカップ出場決定の陰でJリーグには 逆風ムードの1997年

今回のテーマは「ファインダーから見えるもの、地域スポーツの20年」ということですが、お話しすることはほとんどJリーグに関することです。Jリーグ、そのまた下のJFLについても少しお話しをします。

今から20年前と言いますと1997年、サッカーファンとしては一番にジョホールバルが思い浮かぶかと思います。ただ改めて思い返すとあまりいい時代ではなかったとも感じていまして、例えば山一証券を始めとする一連の証券会社の破綻や、神戸の連続児童殺傷事件など、世の中が暗く淀んでいた時代でもありました。そんななかで日本が初めてワールドカップ出場を決めたことは非常に明るいニュースとして当時話題になりました。

ただ、先日ちょうど同じ1997年の朝日新聞の縮刷版を見ていたら、カザフスタンで日本が引き分けて加茂周監督が解任となり、岡田武史監督が就任するとい記事の隣にJリーグ総括記事があったんですね。つまり、カザフスタン戦が行われた10月4日は、Jリーグのレギュラーシーズンの最終節と同じ日だったんです。当初、ワールドカップ予選がセントラル開催になることを考えてJリーグの日程の組んでいたのが、急遽ワールドカップ予選がホームアンドアウェー方式となり、代表戦とJリーグの試合が思いっきり被っていたという、今では考えられないことがあって、こうした光景が生まれているわけです。ここでわかるのは、この頃のJリーグは本当に日本代表の陰に隠れていて、非常に注目度が薄くなっていた時代でもあったということです。ワールドカップ出場は果たしたけれど、Jリーグにはまさに逆風の、非常に厳しい時代でした。

ちなみに私にとっての97年は、ちょうどフリーの

写真家になった年で、何のあてもなくユーゴスラビアのボスニアやセルビアをほっつき歩いて写真を撮っていた時代でした。その後いろんな縁があって帰国後はサロン2002に出入りさせて頂くことになり、そこで本を出したり、隣にいらっしゃる鈴木さんが当時担当されていたサッカークリックというネットメディアで初めて連載を持たせていただいたり、先日亡くなった広瀬一郎さんとお会いする機会もいただきました。そこからスポーツナビへ接点を持ってきたことを考えると、本当にサロンに救われたのが私でございまして、最近は国内のサッカーチーム、それもJリーグより下のカテゴリーにフォーカスするような仕事が増えています。ヨーロッパから地域へというのがこの10年くらいの私自身の流れです。

1999年、フリーゲルズ消滅とJ2誕生の 意味するもの

地域に目を向けるようになったきっかけとして、Jリーグというものが大きなターニングポイントを迎えたのが1999年だったと個人的に考えています。この年の元日、横浜フリーゲルズが天皇杯優勝をもって消滅、同じ年にJ2が誕生してJリーグがJ1とJ2の2部制になりました。これらは全く別の出来事ですが、非常に重要な意味を持っていまして、99年をもって、企業スポーツとしてのJリーグから地域スポーツとしてのJリーグへ転換が始まったと僕は認識しています。Jリーグはプロスポーツじゃないの？と思われるかもしれませんが、実際は企業スポーツの側面を濃厚に残したままプロになったというのが私の認識です。フリーゲルズとマリノスの合併は企業の都合によって起こっているわけですし、企業側もクラブと言わず球団という言葉を使っていた。そこに「地域」はほとんど介在していませんでした。Jリーグが始まってからの5、6年は、クラブという概念がまだ全然希



薄な状況でしたが、そこにJ2ができ、より企業から地域に振れていったのが99年だったのではないかと思います。

(全国のJクラブ点在図を示しつつ)Jリーグのクラブ数は、始まった当時は10チーム。こうして並べてみると鹿島を除いて首都圏もしくは東海道・山陽新幹線の駅があるところにクラブチームがあった形です。それが、J2ができたことによって26チームに増え、九州に3チーム、東北と北海道にもチームができました。さらに2014年にJ3ができ、全部で51チームに。四国、沖縄にもチームができ、新幹線が通っていない駅や全国で1番人口が少ない鳥取、1番面積が小さい香川などにもJクラブができるようになったのです。現在これにプラスしてJクラブは54チームあります。

Jリーグのローカル化と、地域とクラブの関係の変容

J2創設時点でのJリーグのイメージは、「華やかで都会的」「近寄りやすい魅力がある」というように、非常にバブルの余韻を引き継いでいるところもあったと思います。応援も、各クラブの独自色がまだそれほど明確ではなかったと記憶しています。これがJ2ができて以降は、ローカル色の地元っぽいものが増え、身近な存在になっていきました。選手も「ものす

ごいスーパースター」だったのが、「近所のお兄ちゃんみたいな存在がスターになっていく」という形になり、それがブームではなく普遍的永続的になっていく。応援もお国自慢やお土地柄をむしろ全面に押し出していくものにどんどん変質していきました。

こうしたなか最近では、地方自治体がJリーグ、Jクラブにいろんなものを求めるようになっていきます。

例えば北九州。北九州はもともと5つの市が合併してできた人工的な都市で、一体感が薄いという課題があります。そこで、ギラヴァンツ北九州を盛り上げることで北九州というアイデンティティを強くしていきたい、という思いから、自治体がスタジアム作り積極的に取り組んでいます。

秋田にはブラウブリッツ秋田がありますが、Bリーグのノーザンハピネスというチームもありますし、ラグビーのチームもあります。秋田は少子高齢化が激しく、自殺率も全国で1番高いなど非常にネガティブな要件が多いなか、スポーツにどんどん助成をすることで地域を元気にしたいと考えている。いきなり人口を増やすのは難しくても、スポーツのイベントがあることで県外からいろんな人が来る、いわゆる交流人口をどんどん増やすことで地域にお金落ち、元気も出る、というようなことを自治体が求めているんです。

もう一つはコンサドーレ札幌。彼らが今力を入れているのはアジア戦略です。かつてレコンビンを加入させ、最近も海外のすごく優秀な選手を入れています

が、彼らを連れてくることでクラブがASEAN 諸国から注目される。さらにはASEANの企業と北海道の企業を繋げるような役割をクラブが担い、あるいは札幌、北海道をアピールすることでインバウンドを呼び込む役割も担う。自治体もクラブにそうした役割を期待する構図ができています。

つまり、Jリーグはただ単にサッカーだけの話ではなく、それぞれの地域が縮小傾向にある現在、地域がJクラブにいろんなものを求めている。そういう時代になったと感じています。

「2部の時代」~特色ある取り組みはアンダーカテゴリーから？

一方で最近アンダーカテゴリーの方を取材して感じるの、2部の時代が来ているのではないかということ。

その例が、現在JFLで岡田武史さんがオーナーをやっているFC今治と、現在福島県1部のいわきFCです。いわきFCを運営するのは、アンダーアーマーの日本における代理店である株式会社ドーム。読売ジャイアンツも手掛けていてすごくお金を持っている会社ですが、そこが県リーグの3部からチームを強くし、筋肉ムキムキのサッカー選手を作ってフィジカルスタンダードを変え、日本のサッカー、ひいては日本のスポーツを変えてやろうという意気込みで取り組んでいます。今治が今までの日本のサッカーの仕組み

に則って地域創生をしようしているのとはある意味真逆な立ち位置、真逆なベクトルです。こういったチームが今地方にできて来ているのは面白い傾向だと見えています。

当事者の証言を通じ、歴史化するJリーグを記録する

今後ですが、現在、スポーツナビで「シリーズ・証言でつづるJリーグ25周年」という企画をやっています。1993年から2017年までの出来事を毎年ピックアップして、当時の当事者に話を聞いています。フットボールチャンネルでは、来年の横浜フリューゲルス消滅20周年に向け、さまざまな角度、立ち位置の人から「フリューゲルスがなくなったとはどういうことだったのか」という証言を集める作業をしています。

Jリーグは来年で25周年を迎えるということで、どんどん歴史化していると感じます。たとえば今の大学生が華やかなJリーグ開幕の映像などを見るとみんなぼかんと口を開けるわけですね。今のJリーグのイメージと当時のイメージが全く違うのです。そうしたなか、木之本さんや岡野さんがお亡くなりになったり、「あの人に話を聞いておけばよかった」ということを感じるものが最近多くありまして、自分もそろそろそういった、歴史化するものに対して証言を集める仕事をする年齢になったのかなというのを最近感じています。



IT技術とスポーツの変遷 — ネットメディアの20年

鈴木 崇正 (NECマネジメントパートナー(株)シニアエキスパート)



95年のアンプロカップを初めてネットで配信

私が個人的に初めてワールドカップを現場で見たのは1990年のイタリア大会で、その後93年にドーハに行き、いちファンとして「サッカーの仕事に関わればいいな」と思っていました。その後ご縁がありまして、在籍しておりますNECの関係会社の、書籍を出版する部門で、大住良之さんというサッカージャーナリストの単行本を手掛けることになりました。一方でNECという会社は90年代、インターネットを事業にしようとは本格的に考え始めます。通信事業者としてインフラを整備し、皆さまが利用できる環境を整えるということに力を入れていくと同時に、どういう情報が皆さまのお役に立ったり、楽しんでいただけるかということを考え始めた、という時期です。そこで「コンテンツ」という言葉が使われ始め、スポーツというのはキラーコンテンツだということで、NECとしても力を入れていこうということになり、サッカー本を作っていた私も関わることになりました。

最初の仕事は95年のアンプロカップでした。96年のユーロがイングランド大会で、その前年のプレ大会として行われた招待大会ですが、ブラジルとスウェーデンと日本、そして地元イングランドが参加しまし

た。日本代表はまだワールドカップに出場したこともなく、2002年ワールドカップの共催が決まるのも翌年のことで、Jリーグも発足してまだ2年というタイミング。キャプテンは柱谷、代表監督は加茂さんという時代です。そんな時期に日本代表が初めてウェンブリーに立ち、イングランド代表と試合をするという一大イベントが組まれたのです。ご縁のあった田嶋幸三さんを通じて、FAに「新しいインターネットメディアに報道資格を与えてくれ」とお願いしたら、翌年のユーロ96を成功に導きたいという事情もあってか、OKの返事をもらうことができ、スタッフ3、4人で現地に出かけました。当時のイングランド国内の通信状況はまだまだで、ロンドンとはかく、リーズ、マンチェスター、リバプールなどでは、ホテル行ったらまず通信環境の確認という状況でした。プレスルームにもそれほど大容量のものは来ていませんからいろいろな苦労がありました。当時はまだリアルタイムの速報はインフラ的に不可能でしたが、試合終了後すぐに結果やマッチリポートをアップデートすることを試験的にやりました。

そのときに、ネットが有利だと感じたエピソードをひとつお話しします。開幕戦のイングランド-日本戦は日本テレビさんが放送されたのですが、その日の番組編成では、プロ野球の放送が9時まで、9時からドラマ『家なき子』、10時からイングランド対日本の試合が組まれていました。ところがプロ野球の放送が30分延長し、『家なき子』は9時半から10時半までにスライドした結果、日本代表が初めてウェンブリーで試合をする大イベントにもかかわらず、日本中のサッカーファンが10時にテレビをつけたら『家なき子』をやっているわけです。ネットはそんなことはあり得ませんから、もしそこでリアルタイム速報をやっていたら、何万というトラフィックだったと思います。また新聞の場合は、ヨーロッパでの試合の場合、翌日の朝刊が一番早かったのですが、ヨーロッパ



と7、8時間の時差があると考え、インターネットの速報が一番早いニュースになり得る。メディアとして非常に可能性があるということを、我々はこのとき体感したわけです。

翌年のアトランタ五輪では、前園主将のもと、西野監督で28年ぶりに出場を果たします。その予選もクアラルンプールから速報で伝えました。その後97、98年と、日本サッカーにとって大エポックがあったわけですが、その上昇気流とネットの普及がほぼシンクロしている状態だったのです。我々はすごくラッキーで、そこでサロンの仲間たちに会えたことが非常に大きな財産だと思っています。

ネットメディア『サッカークリック』が取り組んできたことと、メディアの今後

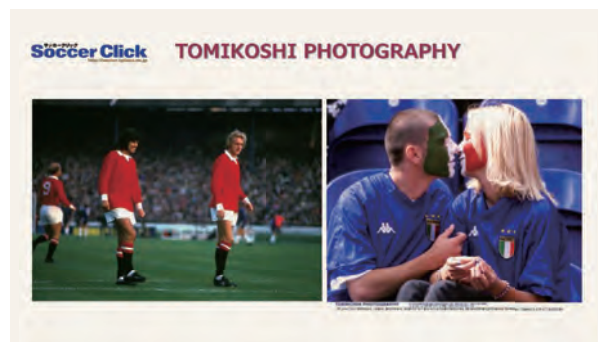
1997年までのこと

- 1990 ワールドカップ・イタリア大会
- 1993 ワールドカップ・アメリカ大会 アジア最終予選（ドーハ）
- 1995 UMBRO CUP（イングランド 5都市）
- 1996 アトランタオリンピック アジア予選（クアラルンプール）
- 1997 ワールドカップ・フランス大会 アジア予選
最終予選 9月6日～11月16日（シヨホールバル）
- 1998 ワールドカップ・フランス大会

97年の2月、フランス大会のアジア最終予選を目前に、『サッカークリック』というコンテンツを開始しました。そこで大住良之さんや宇都宮徹壱さんに連載をお願いしました。スポーツやサッカーを学術的な見地からわかりやすく発表していただく「モダンサッカーサイエンス」というコーナーでは、中塚先生にもご執筆いただき、「なぜ高校3年になったらクラブ活

動を引退するのか」「夏と冬に違うスポーツをやってもいいのでは」といった具体的なご意見や独自の取り組みを発表いただいて、当時としては斬新なコンテンツでした。

宇都宮さんの写真はモノクロームで、一見して宇都宮さんの世界です。また富越正秀さんという、日本のサッカーフォトジャーナリズムの先駆者にもたくさん写真を提供していただきました。われわれが子供の頃、サッカーマガジンで食べるように見て来た写真を、快く掲載させていただいたことは非常に大きかったです。



観客席のイタリア人カップルがキスするとイタリアのトリコロールになる写真のように、サッカーを文化として切り取る写真や、デニス・ローとジョージ・ベストのツーショットのような、富越さんが直に撮ってらっしゃった珍しい写真もそのまま掲載しました。

日本サッカー殿堂入りが決まった今井恭司さんからもたくさんの写真を提供いただきました。「日本代表監督の写真を全部ください」とお願いするとパッと出てくるのが今井さんで、長沼さん、川淵さん、森さんの写真はもとより、その間の下村さんや渡辺さんまでパッと出てくるフォトライブラリーはほかにはありません。往年の釜本さんや奥寺さん、現役当時の岡田武史さんはムルデカ大会だと思うんですが、そういう



珍しい写真もありました。

我々が日本サッカー協会から報道資格を与えられた97年当時、ネット媒体は3社だけでした。いま何社なのかは確認していませんが、さまざまなレベルのものがたくさんあるようです。報道以外では、もちろんこのサロン2002も情報発信していますし、リアルとかバルサといった海外のクラブや、あるいはブンデスリーガのようにリーグ単位でも、日本語で情報提供しています。ネットのグローバルな展開というのは非常に顕著で、情報発信源は個人から企業、団体まで多様化している。コンテンツも多様化していますが、多様化のキーはリッチ化です。今は映像情報までかなりストレスなく見られる、というのがこの20年間の最大の変化で、読み手としては検索や情報の選択性が非常に高まったといえます。

メディアの基本的な課題はいつの時代も変わりません。どういう視点でものを伝えるか、多様化する情報の中でニュースの客観性、信頼性をどう担保していくか、いわゆるフェイクニュースをどう防いでいくかということは常に重要な課題です。

20年で飛躍的に向上したIT技術により、データの価値が変わる

またこれが非常に重要なことなんです。例えば、世界中で日夜YouTubeに新しい映像がアップされ続けてもなぜサーバはパンクしないのか？ 考えたら不思議なことですね。しかし、技術を駆使するとそれくらい大きなスケールのデータを扱うことができ、我々はそうしたITインフラの上で生活しているのが現実です。

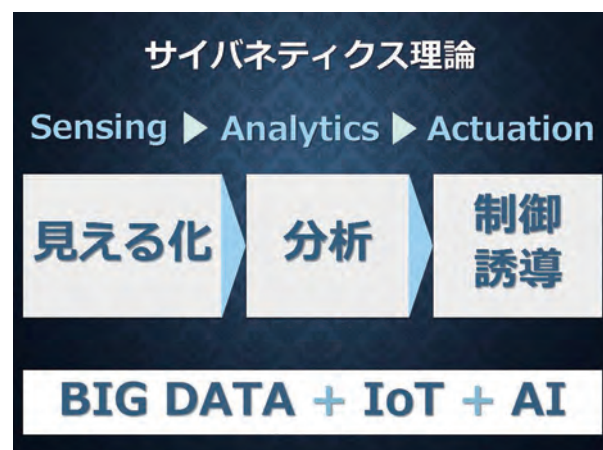
20年間でなにが起きたかということ、コンピューターの処理能力は57万倍、ネットワークの情報の速さは10万倍になります。20年の変化を表す最も小

さい数字が6500倍ですが、これは世界に存在するデジタルデータの量が20年間でだいたいこれくらいになるということです。それでも4桁違うわけです。こうしたことを踏まえると、今後ますますデータの価値が上がります。ビッグデータと呼ばれていますが、非常に多くのデータを集め、AIのような新しい技術でもって料理していく、ということがますます進みます。桁外れの速さで結論が出せるようになります。もうひとつの価値は高度化です。AIというと、囲碁、将棋で最近人間が負け続けていることをご存知だと思いますけれども、重要なのは勝ち負けよりも、トップクラスのプロ棋士達が思いもよらない手をコンピューターに打たれたということです。人知では得られなかった新しい手によって人間が負けたということで、彼らはむしろ負けて清々しい、新しい囲碁観、将棋観ができたと言っています。

情報というのはいろんな情報をまず認識する＝センスする必要があります。昔の情報処理というのは、人間が情報を整理して並べ直し、きれいな形にして順番通り入力しないとコンピューターが処理してくれませんでした。今は、映像や音声や人の動きのような非定型な情報を認識し、役立つデータとすることができるようになってきました。

一番すごいのは映像です。映像の情報がデータ化され、分析すると、次に起こることを予知・予測までできるようになります。たとえば今自動車には自動ブレーキが実装されていますが、映像で危ない状況を把握し、ブレーキまでかけてしまうわけです。分析結果から導かれる制御まで行う、というようなデータの価値が、今もう我々の生活の中に入ってきているということです。

よくAIというと脳の形を想像しますが、実際は「見る」ところが非常に重要です。ネットワークがすごい容量を伝送しますから、リモート制御もできます



し、映像が暗くても、霧がかかっている映像の内容を把握できます。たとえば皆さんショッピングセンターの駐車場などでは、自動的に精算をして出庫できますよね。駐車場の中は大抵暗いんですけど、ナンバーをカメラで認識し、車と利用者をマッチングするというような技術がそれを可能にしています。最近のカメラでは、表面だけでなく物質の内部も知ることができます。目視では認識できないようなコンクリートの小さな亀裂を定点で撮り続けると、内部にどのような空洞ができていくかまでわかるようになってきています。

審判、査定、セキュリティ…。スポーツシーンと技術の関係

スポーツとIT技術の話です。富士通さんは、映像情報の分析から審判法の精度の向上にチャレンジしていらっしゃいます。体操やフィギュアスケートは技が非常に進歩していて、それによって採点も細分化され、プログラムが非常に複雑になっていますが、そこにAIの知識、ITの経験を活かせないかというチャレンジです。

我がNECはバレーボールの女子のチームを持っていますので、例としてトスを上げるセッターの映像をたくさん集め、それらをAIが分析することによって、ちょっとしたセッターのくせを見分けて、次はオープン攻撃なのかAクイックなのか時間差なのかバックアタックなのかを瞬時にわかるようなことができないかという取り組みをしています。

IBMではワトソンというAIが有名で、いろんな場面で活用されていますが、スポーツでもトップアスリートのサポートをしていらっしゃいます。

それから「データスタジアム」ですね。ゲーム分析からいろんな選手の査定、クラブ経営に関することなど、さ

まざまなデータで実務に役立つものとしてやってらっしゃるのは非常に価値が高いと思います。

NECのもうひとつの取り組みはセキュリティに関するものです。今年のヨーロッパチャンピオンズリーグの決勝はウェールズで行われましたが、NECはサウス・ウェールズ警察に犯罪予防のシステムを納品しました。街中に定点カメラを置き、50万枚の要注意人物写真とのマッチングで、自動的に危険人物を検出するというもので、これにより、1週間にわたって街中に10mおきに警官が立って警備する必要がなくなりました。とはいえこれはマッチングなので技術的にそう難しくはなく、危険人物が画面に入ってきたかどうかを見るだけのもの。NECが最近取り組んでいる技術は、あらかじめ危険人物の情報がなくても、群衆の中で「普通とは違う挙動」を検出するものです。年末のアメ横でベテラン刑事がスリを見破るといいますが、それと同じことをカメラとAIでやろうとしているわけです。

あとはマーケティングの高度化です。「こういう層の人たち1000人に売りたい」というのではなく、それぞれどういう嗜好で、どういう買い物をして、何を買わなかったかという購買行動がデジタルでわかる時代になっています。NTTさんではそれを事業で活用できるかどうか、アプリケーションを使って実証しているらしいです。

さらに、最近はスポーツAIという会社が、AIで試合結果の予想をし始めています。エルゴラッソの選手データ、データスタジアムの試合データなどをもとに、AIが試合結果を予測し、楽天でtotoを買えるという仕組みです。AIの話を出すと必ず「競馬当てられますか?」と聞かれるんですけど、それに近いことを始めているところがあるということです。実際に当たると言っているわけではないので誤解なさない

Data Stadium **クラブ経営・チーム強化のための多角的活用**
Data Stadium ホームページより抜粋

●プレーデータ ●トラッキングデータ ●公式記録

短期的活用

データ×映像分析から

①自チーム状態 ②相手の分析 ③戦い方検討
→次の試合のための練習に落とし込む

中期的活用

チーム強化のために

①チーム編成・選手育成記録
②査定から年棒・予算管理
③選手・チームの記録とノウハウの蓄積

**チームは1年のために、クラブは5~10年のために。
常にいい競争状態をつくる、そのためにデータを使う。**

NEC **リアルタイム顔認証ソフトウェア** **スタジアム・セキュリティ**
「NeoFace Watch」 NECホームページより抜粋

世界No.1の認証精度を有する顔認証技術を用い、専用の警察車両に設置したカメラに映った人物と、監視リストに登録された容疑者や要注意人物、行方不明者など計50万枚の写真を実タイムに照合し、高速かつ高精度に人物の特定。

本システムをイギリスのサウス・ウェールズ警察に提供。空港やスタジアムなど人の往来が多い場所の安全性の確保に活用される。6月3日、UEFAチャンピオンズリーグ決勝戦の開催週にカーディフ市のウェールズ国立競技場で導入・活用された。



画像・映像データの価値

見える化 Sensing

リアルタイム、リモート

denoise dehaze

表面だけでなく内部を見る

でいただきたいのですが、今までの確率論とは違う次元の方法で試合結果を求めようとしているところがすごいと思います。

技術の適用範囲は個別から全体へ。そのときに必要なこととは何か？


今までご紹介したのは、セキュリティや審判法など、AIが分野ごとに活用されるお話でしたが、今後のポイントは個別ではなく「全体」です。お金儲けのため、安全のため、選手の育成のためと、個別バラバラにやっていることが、これからは相互にリンクすることになっていくと思います。新しい技術が全体最適に向かう、より高度で複雑なことをするということです。技術の側の課題は、わかりやすさ、使いやすさ、なぜそうなるのかを説明できること、またプライバシーやモラルを守って技術を使うことが一番大切です。そういうところを重視してやっていかなければいけないというのが今後の課題です。

こういう新しい技術はまず、「人の仕事が奪われるんじゃないか」と懸念を伴います。人間と機械の対比

技術の可能性と課題

全体最適に向かうAI・IOT
より高度・複雑な課題に
よりスケールの大きな課題に

わかりやすさ・使いやすさ
説明の合理性・納得性
プライバシーとモラル

で語られることが非常に多いのです。しかし、AIに取り組む技術者のお話を聞くと、技術を極めれば極めるほど人間のことが愛おしくなる、人間がやっぱり大事だと言い、機械をどう使うのかを真剣に考えているのがわかります。中塚さんが接していらっしゃるような優秀な高校生、中学生は、新しい技術を前提にこれからの社会を作っていけるわけで、教育の果たす役割は非常に大きいと感じています。 



指導現場から見えるもの —「するスポーツ」の20年

中塚 義実 (筑波大学附属高校)



20年前にサロン2002と言い出した頃、あるいはそのもう少し前だったでしょうか、インターネットはこの学校にも導入されはじめていました。しかし学校の先生に話を聞いても何が何やらさっぱりわからない。そこを鈴木さんは私にわかるように説明してくれていました。今日の話にもギリギリついていけました。ありがとうございます。

さて、鈴木さんが語ってくださったようなすごい時代を迎える中で、いまどきの高校生はどうなっているのかというのが一つの問題意識です。「指導現場から見えるもの」ということで、お話ししたいことは山ほどあって全然絞りきれず、大変なことになっていますが、大きく2つ。前半戦は、いまどきの高校生についてです。どちらかという親父の小言みたいな話になってきます。サロンは20年ですが、私がこの学校の教員になってちょうど30年目です。ですからこの30年間の定点観測でということになります。もう1つは、高校生年代にとっての「するスポーツ」の変化の過程です。いまではリーグ戦が当たり前になっています。私はユースリーグ構想の言い出しっぺで、広げ役だったので、そのプロセスから見えてくるものをお話ししたいと思います。これも親父の小言みたいなことに最後はなりそうです。



体育実技の20年（30年）

体育の授業は、あまりこういうところでは話題にならないのですが、私は「するスポーツ」の観点からも「みるスポーツ」の観点からも、ものすごく大事だと思っています。

学校の体育の授業がどうなっているかご存知でしょうか。私が着任した頃、1、2年生の高校生の体育の授業は、男子が週4時間で女子が週2時間でした。女子は半分体育、半分家庭科です。男子が家庭科をやらなかった時代ですね。それが男女同じ時間数になり、今ちょっと時間数が減ってきているところです。情報という教科ができたりして、全体的にどの教科も授業時間数が減ってきたためです。視点を変えると、大学では1991年から一般体育の授業が必修ではなくなり、大学ごとの選択になりました。実はその流れは高校にも中学にもひたひたと迫ってきていて、学校の教員で問題意識を持っている人は、「ただゲームだけやっている体育の授業だったら休み時間と一緒にだから、存在意義はない」と言ってきます。だから文科省で教育課程作っている人たちは「(体育の意義につながるような)エビデンスを示せ」と言われるわけです。多くの体育教師は「体育はあるのだ」と思っているようですが、私はすごく危機感を抱いています。

全体的に授業時数が減ってきているので、一つの種目にかかる時間は減ってきます。しかしまとまったものを学ぼうとすると、ある一定の時間数が必要です。そこで、種目を選択して学ばせる方法が取り入れられます。そうすると、昔はいろんな種目をみんな一通りやっていましたが、選択しなかったらバレーボールを全然やらないまま高校生を卒業するようなことが起きてきます。例えば筑波大学体育専門学群でもバレーとバスケットが選択です。教育実習でここへ来て、バ

レーボールを受け持つことになった学生が、「実はバレーボールをやったことはありません」。サッカーでは一流かもしれないけど、バレーボールはやったことがない。体育の先生になろうとする学生が、です。こんなことが起きているわけですね。

だからこの言葉が出てきたときはショックでした。「体ほぐし運動」。聞いたことありますか？実は「体ほぐし」が小中高の体育で必修なんです。1999年からです。逆に言うと、心と体がほぐれていない青少年があまりにも増えてきて、我々が幼い頃に「群れ遊び」でしていたようなことを体育の授業でやらなきゃいけない。そんな時代になってきているということです。

「体育実技」の20年(30年)

- ◆ 体育実技の授業時数から
 - ・男4女2(1987)→男女3(1994)→3年間で8単位(2003)→完全学校週5日制(2002)、「情報」総合開始(2003)⇒各教科減
 - ・大学の一般体育が必修から外れる(1991大学設置基準大綱化)
 - いずれは高校・中学・小学校の体育も??(体育の危機)
 - 「体育の存在意義をどう示すか」「エビデンスを示せ!」
- ◆ 体育実技の内容・方法から
 - ・「選択制授業」導入(1991)〜/本校では(1996)〜
 - 自分の専門(得意)種目しかやらない生徒&教生増
 - ・「体ほぐし運動」導入(1999)〜
 - ・「体力」の低下傾向(1985)〜 ... 実は二極化
 - ・球技における技能差の拡大 ... 学校外の少年スポーツの隆盛(?)
 - サッカーは小学校体育で取り上げにくい教材に

また最近、サッカーが小学校体育で取り上げにくくなっていると、小学校の先生からよく聞きます。サッカーがものすごく上手な子と、何もやってない子が同じ教室にいるわけですね。サッカー協会もこのことに危機感を持ち、小学校体育サポートプロジェクトを作って、体育の授業でサッカーをちゃんとやってもらえるようにしようとしています。小学校体育でも授業時数が減っているのだから、サッカーで学べることを明確にし、現場の先生方が取り組みやすい方法を伝えていかないと、サッカーじゃない種目の方がいいんじゃないかとなりかねないです。

部活動の20年(30年)

部活動の観点でいうと、部活を見ない「なにも先生」と、部活ばかりの「部活先生」の二極化は、昔からいまに至るまでずっとあり続けます。けど実は、「なにも先生」は何もしていないのではなく、授業の準備など、研究熱心な先生だったりするんです。多くの学校の運動部が二極化を前提に展開されていますが、それじゃいかんということで部活動

にかかわる業務を公平に負担しようとすると、みんな一律に多忙先生になってしまう。生徒の方も、意欲的な生徒は、部活動だけでなくいろんな活動、国際活動などいろいろ関わり多忙先生になり、学業心配生徒は塾予備校に依存する。私は高体連研究部というところにも深く関わっていますが、部活動をめぐっては、少子化をはじめとする社会全体の問題だけでなく、競技と教育の狭間でここにあげている問題がいろいろ出てきています。一方、年に一度の全国高体連研究大会では、こうした諸問題の解決策となるような、全国各地のさまざまな実践事例を取り上げていこうとしています。学校の部活動にいろいろ問題があるのはわかるけど、まだまだ大きな可能性も秘めているぞ、というところですよ。

「(運動)部活動」の20年(30年)

- ◆ 筑波大学附属高校の定点観測から見えるもの
 - ・教師側:「なにも先生」と「部活先生」の二極化 ← OBによる指導
 - “公平に”負担 → 「多忙先生」(余裕なし)
 - ・生徒側: 1)意欲的な生徒は、さまざまな活動に参加→「多忙生徒」
 - 2)学業心配生徒は、続かない→塾・予備校への依存
 - 3)コミュニケーションの質と量の変化
- ◆ 全国的な傾向としてー高体連研究部から見えるもの
 - ・少子化の影響/進む二極化
 - ・教育と競技の狭間で...特待生問題(2007)、暴力「体罰」問題(2012)、「ブラック部活」問題(2015)〜、健康・安全面への配慮...
 - ・全国高体連研究大会で紹介される、新しい取り組み
 - ・多様なニーズの受け皿となる部活動の実践
 - 部活動と地域の連携事例etc.
 - ⇒ 部活動の可能性と課題をさぐっています

生徒の変化

- ◆ 最近いつも言っていること
 - 「(自分のアタマで)考えろ!」「アクション起こせ!」
 - 「全体を見る!」「サンマ(時間・空間・仲間)!
 - 「ちゃんとしゃべれ!」「聞け!」「Face to Faceや!」
 - 「あいまいにするな!」「やり切れ!」「ちゃんと遊べ!」
- ◆ 最近感じる生徒の様子
 - 言われたことはきちんとやるし、素直だが...
 - ・「コミュニケーション」の質と量が大きく変わってきた
 - ・ソウゾウリョク(想像力・創造力)の欠如
 - ・「決断」できない(多数決に依存/「先生」に依存)
 - ⇒ “遊び”をつくりあげるのが下手くそ。
 - 海外の同世代はもっとやっている。このままでは...

生徒の変化とその背景

私の話は全然客観性はないんですが、自分が関わっていることだから胸を張って語ることができます。最近生徒たちにこんなことばかり言っています。「自分の頭で考えろ」、「人に聞くな」、「何かアクションを起こせ」、「全体を見る」、「ちゃんと喋れ」、「聞け」、

「フェイストゥフェイスや」。「あとでメールでねって、曖昧にするな」、「その場で結論だせ」、「やりきれ」、「ちゃんと遊べ」。これが最近の生徒に言い続けていることです。

言われたことはきちんとやるし素直なんですけど、本当にコミュニケーションの質と量については問題が多い。生まれたときから、というわけではないけど、手元にスマホがあって、どっぷり浸かっている状況です。

我々の時代は、ものすごく想像しないといけなかったわけです。サッカーマガジンでゲルト・ミュラーの得点シーンを写真で見る。文字による説明があれば、得点シーンにたどりつくまでがどうなっていたのかを想像して、ダイヤモンドサッカーの放送を待つ。まだかまだかと待ち続けたそのシーンが出てくると、脳の中に強烈にインプットされるわけです。今の生徒は猛烈な勢いで情報が入ってきて、一つの情報を大事に育むゆとりがない。想像力が必要になっており、だからソーゾーリョク(想像力・創造力)が欠けているなど感じます。決断できない、多数決に依存、先生に依存、遊びをつくりあげるのがものすごく下手くそになっている。はっきり言ってオヤジのたわごとです。

うちの学校は幸いなことに、シンガポールの学校とか海外の高校生と接する機会があります。彼らは若い頃から責任を与えられており、そういう生徒はかなりやります。けど海外や他校の生徒と交流する機会を持たないまま、自分たちの小さな世界でうごめくだけの、我が国の大部分の高校生は、自分がそういう目で見過ぎていいのかもわからないけど、ほんとうに大丈夫かと、ものすごく心配です。

よく「ゆとり教育」の弊害が語られますが、私は特にそうは思いません。むしろ、子ども時代からの群れ遊び不足、そして先程も出てきたITへの驚くべき依存度。こちらの方が大ごとです。

これは全国高体連研究大会で香川県の高校の先生が

発表された2013年のデータです。高校の運動部員に対する調査で、11%がパソコン・携帯電話を1日3時間以上使っている、というものです。部活をバリバリにやっている子ですよ。平均時間でも78分で、これは大変だという発表でしたが、去年の内閣府の調査だと、高校生のネット利用平均207分、20.5パーセントが5時間以上。1日何をやっているかという調査をして時間を足し合わせると24時間をはるかに越えます。つまり彼らは何かをやりながらスマホをやっているわけです。そういうことができる世代と言えるのかもしれないし、本気になって何かに向き合う姿勢に欠けているような印象があります。

だからこそフットボールは大事なんです。試合中にチームメイトとスマホで連絡とることはできません。マークの受け渡しはちゃんと声をかけあってやらないといけない。

大人も変わってきたなということも自戒の念も込めて感じています。

DUO リーグの発足と発展

オヤジのたわごとからリーグ戦の話に続けていきたいと思います。1995年、この頃は負ければ終わり一発勝負の大会しかありませんでした。地区大会1回戦で負けると年3試合しかありません。これじゃいかんということ、構想を練ったわけです。同じくらいのレベルの相手と定期的に試合ができるようなリーグ戦をやろうと。大事なのは理念を掲げて、それに賛同する人たちが関わってくる仕組みを作ることであり、そして1996年、サロンが動き出す前の年ですね。ちょうど鈴木さんがアンプロカップの取材に行かれたころ、私はこんな構想を仲間に話をしました。ちなみにそのときの構想は、お手元の資料につけています。サッカー医科学研究会で発表したものです。

生徒の変化の背景にあるもの

◆「ゆとり教育」のせいではない！

- 1)「サンマの喪失」⇒「群れ遊び」不足
- 2)ITへの依存(スマホ、ネット、ゲーム...)

とくにフットボールが重要！

＜香川県高体連調査(2013)＞
「11%がパソコン・携帯電話を3時間以上利用していることに驚いた。平均時間でも一人あたり78分」

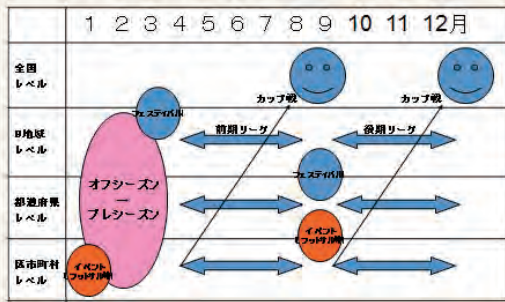
＜内閣府による調査(2016)＞
「高校生のネット利用は平均207分(1日)。20.5%が5時間以上、72.1%がスマホで2時間以上」

◆「大人」(教師・コーチ・保護者...)も変わってきた
真面目だが独創性なし(マニュアル依存)
⇒DUOリーグからみえるもの

東京都高体連加盟校のサッカー(1995)
—リーグ戦が始まる前のユースサッカー環境—

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12月
全国レベル										高校総体	全国ユース選手権	高校選手権
地域レベル					関東大会							
都道府県レベル												
区市町村レベル												

リーグ戦を基盤としたユースサッカー構造 (私案)



例えば10チームだと1日5試合やるわけですね。大事なのは、こういった構想を面白い“遊び心”を持った大人たちの存在です。終わってからその辺へ飲みにいき、「リーグの名前、何にしようか」など、“Face to Face”であだこうだ言いながら作り上げてきました。お互い意思疎通を図りながら、どういふふうに広げていくかという話もするわけです。

広げていく上で大事なのは理念を共有すること。小さく立ち上げ大きく育てていこうということで、これ以降どんどん仲間が増えていくわけです。

DUOリーグの理念

—文化としてのサッカーのあり方—

1. 「歯磨き感覚」「引退なし」のスポーツライフ
サッカーの生活化
2. 「補欠ゼロ」のゆたかなクラブ育成
チームからクラブへ
3. 強いチームとたくましい個の育成
レベルアップ
4. サッカーをささえる人材の育成
自主運営と受益者負担

戦略的にも動きました。サッカー協会の機関誌に連載するチャンスも得られたし、サッカー協会の指導者養成の場で話をするチャンスもありました。JFAによるユースリーグ構想も、ここを出発点として全国に広がっていきました。このど真ん中に私もずっといたわけです。現在このような形でレベル別にリーグが構成されているのはご存知の通りです。当初からサッカーリーグの合間にフットサルのイベントを入れてサッカーもフットサルもできるようにしていこうという構想を持っていました。このあたりについては、あとで本多さんに話をしてもらいます。

DUOリーグのいま

DUOリーグのいま

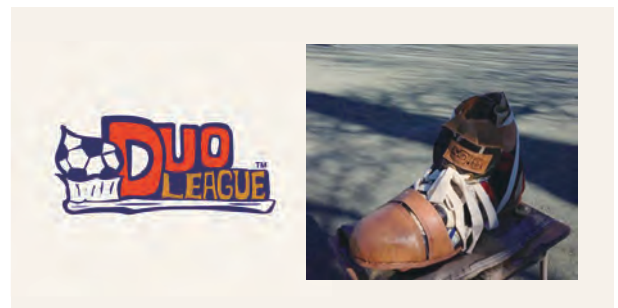
- “理念”は徐々に実現されつつある
→リーグ戦は「当たり前」(ただしクラブ間で温度差あり)
- 学校教育としての限界が見えつつある
→学校の先生だけでサッカーをささえるのは「無理」
→卒業生や地域との連携が不可欠
- 互いの顔が見えなくなりつつある
→飲み会減(メール増)/新日メンバーに意識のずれ
- “公認化”をめぐる功罪が見え隠れする
→JFAの方針によってリーグ環境は整備されたが、
「上に合わせよう」「きちんとやるう」の意識が強まり、
「遊び心(スポーツマインド)」が失われてきた...

ここからはDUOリーグの今です。理念は徐々に実現されつつありますが、学校教育としての限界が見えつつある。そして規模が大きくなるにつれ、互いの顔が見えなくなりつつある。“公認化”をめぐる功罪もあります。ちゃんと遊ぶための仕掛けだったのですが、そのうちみんな真面目になっていくわけです。

そんな矢先、「トロフィーがない」という間抜けな出来事が発生しました。持ち回りのトロフィーがなくなったんです。これではいかんということで、これもサロンでつながったアーティストの土谷享さんと佐藤一郎さんとともに、履けなくなったサッカーシューズの革を集めてトロフィーを作るという、スポーツとアートの融合プロジェクトにしたんです。

このときDUOリーグのロゴも、土谷さんに作ってもらいました。土谷さんはサロンのロゴも作ってくれた方ですが、DUOリーグのロゴは、歯磨き感覚のスポーツライフということで、歯磨きの上にDUOリーグが載っているというものです。

今日、会場には佐藤いちろう君が来ています。彼を講師に、DUOリーグの試合後に靴磨き講習会をやっているところです(写真は略)。履けなくなって捨てるだけのサッカーシューズを持って来て、ゴシゴシ磨いて、そこから切り取った革を張り合わせてできたのが、このトロフィーです。大事なのは、遊び心を取り戻す試みということ。ただこれを面白がってくれる大



人が減ってきているんです。

世界に誇れる学校体育、小中高と12年間の体育実技が保証されている。学校の中でいろんなスポーツイベントがある。そして部活動、全国的な競技会、それらが卒業生と繋がり地域社会の基礎になっている。これはもうすごいことです。

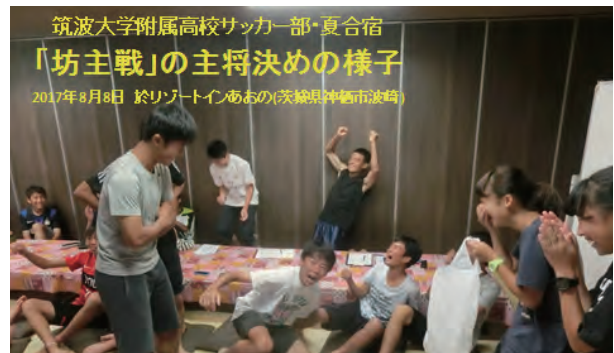
その一方で、体育とスポーツの混同、チームのみでクラブ育たず、ピッチの外は後回し、最後の大会が終わるとアマチュアなのに引退。

日本のよさを活かしながら、生涯にわたってスポーツが楽しめる環境をつくっていきたいということを強く思います。我々サロン2002では「スポーツでゆたかな暮らしを」と言っていますが、言い方を変えると「遊び心を取り戻せ」ということです。「遊べるやつは仕事もできるんや」ということも生徒たちにも言っています。本気の遊びが人を育てる。これってよく考えると、知徳体のバランスのとれた人間形成、最近よく聞くフレーズですが、そこに行き着くわけなんです。クーベルタン、あるいは嘉納治五郎、こういった人たちが昔から言っているわけですよ。「ちゃんと遠くを見ましょう」「フランクに喋りましょう」そして「しっかり行動を起こそう」と。こういった先人が



言ってくれたことを大事にしていきたいなと思います。

最後におまけです。これはうちのサッカー部で毎年恒例の夏合宿のワンシーン、坊主戦のキャプテン決めの場面です。くじで負けた二人がキャプテンになって、坊主をかけて試合をする。そのキャプテンがメンバーを取り合ってチームを作って試合をし、負けた方は坊主にする。マネージャーに自分のくじを引いてもらった人はセーフです。最後に残った3人が自分の運命を決めるくじを引くんですけど、この写真で、手前のマネージャーがあやまっているのは、ごめんなさい、あなたを引くことができなかったというところですね。そして最終的に残ったこの2人、うちの両サ



イドバックなんですけど、これが坊主をかけて試合をやり、右サイドバックの頭が丸くなりました。もちろんみんな「おれ絶対嫌だぜ」って言って大騒ぎしながらやっていますが、こういうアホな遊びを本気になってやれるような環境、それが人を育てる上で本当に大事なのだと思います。ただ保護者会でこんな話をすると煙たがられるわけです。これ体罰になりませんか、みたいな空気ももちろんある。そういう社会の風潮も踏まえながら色々考えていかなきゃいけないなというところですよ。

以上、ほとんどオヤジの小言みたいな感じでしたが、私は大事だと思ってますのでお聞き頂きました。ありがとうございます。 □

仲澤 最近学生と話をしている時に、今、自分の時間が傾聴ボランティアになってないかと確認することがあります。世代間のギャップを怖れてのことです。中塚さんのように、思ったことをずっと言っているのは羨ましいなあと思って聞いていました。現在の学生は、ネット上の検索能力などが高く、完成度の高い情報の加工などが上手である一方で、ゼロから創り出す力 (something from nothing, Robinson, 1970¹) に乏しいという印象があります。ゼロから創り出す力は、遊ぶことから育まれるもので、その意味で中塚さんが重視されるプリミティブな遊びの経験はとても重要だと思います。

中塚 ありがとうございます。ここからは指定発言者という形でお願ひします。今日は神戸からきていただきました、本多克己さんです。サロンの長いメンバーで、理事として主にU-18年代のフットサルの事業に取り組んでいただいています。

¹ 「黒人初の大リーガー」と称されるジャッキー・ロビンソンは「貧困に苦しむアフリカンアメリカンは新聞紙でボールとバットをつくり自身の才能を開花させた。重要なことは挑戦の機会が平等に与えられることだ」と説いた。アメリカ大リーグにおいて人種差別と戦ったロビンソンはドキュメンタリー映画『42〜世界を変えた男〜』（2013年日本公開）でも知られる。



指定発言者より

フットサルの黎明期から普及発展が進んだ
20年（本多克己氏）

本多 サロン2002で理事をつとめております本多です。この20年は、フットサルの黎明期から普及発展が進んだ20年でもあります。90年代後半から普及がはじまったフットサルは新しいスポーツですから新聞にもテレビにも露出はありません。しかしこの時期は鈴木さんから話があったとおり、インターネットの普及と重なる時期でもありましたので、インターネットの活用によって民間のフットサル施設のPRや予約受付ができるようになったり、民間のフットサル大会が行われたり、さらには個人参加のフットサルというサービスも生まれ、まさにこの20年でインターネットと足並み揃えて普及してきたスポーツだと思います。そんな中でサロンにはフットサルに関わる方がたくさんいらっしゃって、フットサルプロジェクトとしてフットサルの未来を考える場も生まれました。

FIFAが正式な競技としてワールドカップを開催するようになって、日本サッカー協会（JFA）の主催大会としてU-12、U-15、大人の大会、女子の大会と、様々な大会が行われるようになりましたがU-18の大会だけがなかったんですね。高体連との調整というのもあったのかもしれませんが、U-18になったら大人と一緒にやってくださいということです。中塚さんは東京都でこの世代の大会を10年以上にわたって開催されていましたし、私もホンダカップという大会でU-18のカテゴリーを2010年に新設して、この世

代の盛り上がりを実感していました。その実感と、これもひとつの遊び心ということかもしれませんが、2011年の秋に筑波大附属高の体育教官室で中塚さんとそろそろ大会開催の機運は熟してきたのではないかと、という議論をして、さらにその場から複数の関係者に電話したところから一気に話は進み、2012年3月に「U-18フットサルトーナメント」として9地域の代表によって全国規模の大会を名古屋のオーシャンアリーナで開催しました。もともとJFAの主催大会であるべきだと考えていましたけども、JFAとしては、まず組織の外に大会を作ってもらってそれを公式の大会にしていく方が話を進めやすいということで、大会を新しく作りました。この写真は決勝戦です。FKを蹴っているのが作陽高校で、壁をつくっている赤いフォームは名古屋オーシャンズのU-18です。このFKが試合終了直前に決まり、同点。延長戦でパワープレーから決勝点を決めた名古屋オーシャンズU-18が初代王者となりました。このすばらしい試合を見ながら、これはしっかり続けていかなければならぬと話をしました。これがおそらく最初のU-18世代の全国規模の大会になりました。翌年の会場で行われたシンポジウムではJFAやフットサル連盟からの演者も参加し、そこで賀川さんが「高校生ではなく、U-18」と道筋を示してくれました。

なぜU-18の大会をサロンでやるんだということを改めて考えてみると、サロンの理念である「スポーツで生活を豊かに」していこうということです。誰の生活を豊かにするかと考えたときに、フットサルをプレーする高校生たちの姿がありました。サッカー部になじまない人、サッカー部を辞めた人、そういう人がフットサルを始めていた。あるいは、サッカー

部に所属しているけれども、BチームCチームで試合に出る機会のない人がフットサルをやっている。さらに自分はサッカーじゃなくてフットサルをやるんだと、自主的にフットサルを選んだ選手も増えてきていました。そのなかには、高校に通わない選手もいました。引退なし、補欠なし、多様性を受け入れる環境づくりがこの世代のフットサルには求められていました。それはサロンとして取り組むべき課題でした。

JFA主催の大会ができるのは5年後くらいかと思っていましたが、全国にくすぶっていた火が一気に燃え上がったという感じで、2年後にJFA主催の大会が生まれました。翌年の2015年には、「U-18フットサルトーナメント」からユース選抜フットサルトーナメントに名称を変更して、法人格を取得したサロンが主催となりました。

そして、今年の1月にサロン主催で「U-18フットサルリーグチャンピオンズカップ」という大会を作りました。各地のリーグのチャンピオンの大会を作ること、全国でU-18リーグが整備され、リーグ戦の文化が生まれ育っていくきっかけになれば、という思いで開催しました。大会の報告書にも、「大会を終えてここがスタート」として中塚さん執筆によるサロンからのメッセージが掲載されています。初代王者は、Hero FCという静岡県のチームです。開催まで時間もお金もないなかで、静岡県の協会の皆さんに心のこもった運営をしていただいて、エコパアリーナというすばらしい会場で開催することができました。

中塚 ありがとうございます。続きまして佐藤一郎さん、靴郎堂本店でアート活動をされています。

スキンプロジェクトについて（佐藤一郎氏）

佐藤 こんにちは。靴郎堂本店の佐藤一郎です。中塚さんのお話にもありましたが私は靴屋さんです。夫婦でKOSUGE1-16というアーティストユニットをやっている、土谷享、車田智志乃という2人といっしょに、サッカーシューズでトロフィーを作りました。これはアッパーと呼ばれる部分しか使っていないので、ソールが綺麗な状態で残るのですが、これで何かできないかなという遊び心で、サンダルをつくることになりました。それからワークショップをやったり、売り物にしたり、いろいろと形を変えながらやってきました。サロン2002の事業としては、スキンプロジェクトという名前が分かりにくいので、今はリサイクルプロジェクトという名前でやったりもしていま

す。今日、娘がつけてるボールで作ったコインコースとか、サッカーだけに特化してないのですが、サッカーのいろんないらぬ廃品を面白心でリサイクルしています。廃品の出先がほとんどDUOリーグなので売り上げ資金をグラウンド費用にあてたりして、リーグに戻すようなフェアトレード的な要素も含まれています。お手元の資料にハガキがあったと思うのですが、2014年に個展をやったときのチラシです。もう終わってしまっているのですが一応ブロマイドというか記念品としてお配りしました。スキンプロジェクトにご興味あるようでしたら、チラシを持ってきています。プーマとかナイキとかサッカーシューズのチラシを模してDUOリーガーのグラウンドとDUOリーガーの部室を写真にとって、パンフレットも作りました。これは最初のころに作ったもので数に限りがありますが、ご興味ある方は、靴のトロフィーのところにも置いてありますのでよければお待ちください。

中塚 スキンプロジェクトはオリパラの事業で豊島区がやっているブースでも発表して頂きました。第1部の最後にもう一方、特に最初のJリーグの観戦のところとも関連するかもしれませんが、株式会社セリエの徳田仁さん。観戦ツアーの20年、それこそ98年のフランス大会の前あたりからでしょうか。その辺りのことをお願いします。



観戦ツアーの20年（徳田仁氏）

徳田 株式会社セリエという、ほとんどサッカーのこ
としかやってない会社をやっております徳田と申しま
す。まず観戦ツアーというのは、いつ頃できたのか。
観戦ツアーのルーツはなんだろうというところに遡っ
てみます。これ20年じゃ足りないのですが、ドー
ハの悲劇の93年ごろまで遡っていろいろリサーチし
てみると、先ほどの鈴木さんもドーハに行っていた一人
だと思えますけども、ドーハ行った人、何人かに聞き
ましたら、その時は観戦ツアーとして募集していく
というのは見たことがないと。僕が聞いた人はだいた
い中東に仕事で行った人がむこうの日本人会の声かけ
で集まって行ったということでした。日本から旅行会社
が募集して、と言うのはおそらく表向きはなかったの
ではないかなと思います。ではいつ頃なのかなと遡っ
ていくと、日本が出なかった94年のアメリカのワ
ールドカップ、これは主に日通旅行さんとかJTBさん
が1部門でやっていて、100人単位の規模だった思
います。その頃観戦ツアーと呼んでいたのか、応援
ツアーと呼んでいたのかちょっとわかりませんが、そ
ういう時代でした。私の会社が本格的にツアーを
始めたのは97年のフランスワールドカップの予選
からです。加茂さんが更迭になったりした予選の
最後がジョホールバルです。先ほど鈴木さんが
インターネットの普及と20年を対比させてお話し
されましたが、その頃の観戦ツアーの受付は
インターネットではなく紙でした。ジョホールバル
の試合が決まったのが土曜日、カザフスタン
戦の次の週の週末にジョホールバルで試合があ
ったんですね。土日明けて月曜の朝から電話が
鳴り止まなかったのを覚えています。その時代
は完全に紙と電話で受け付けていた状態です。
そして2002年の日韓のワールドカップ、この
頃は紙媒体とインターネットと両方やってまし
た。会社的にもちゃんと取り組み始めたのは
その頃です。2006年のドイツ



の時は、完全に
インターネット
だけ。今はイン
ターネットだけ
で、たまに見
られないので
紙を送って
くださいとい
われると、ス
タッフがプリ
ントして送っ
ているとい
うような状態
です。

97年の時点では既に観戦ツアーという言葉が存
在し、私たちが使っていましたし認知されていま
した。そのころは代表チームの観戦ツアーで、当然J
リーグも国内はやってましたけどそのほかの海外のツ
アーはいつから始まったのかと考えると、特定クラ
ブの試合を海外に見に行こうというのは、98年のフ
ランスで活躍したヒデがペルーじゃ行ったときだ
ったと思います。98-99シーズンですね。このとき
のペルーじゃに行った人は200人くらいいると思
います。びっくりするくらいの数なんですけども。その
頃は20人とかで1つのグループで行ってました。
今はインターネットが普及したということがありま
すけれども、ドイツ、イングランド、イタリア、ス
페인、この4大リーグに関しては全部の節を設定
して、お客さんが自分の都合に合わせて見たい試
合に合わせていくというスタイルになっているの
で、大きいグループで行くというような事はほと
んどないような状態です。ただクラシコとかは
2、30人集まるという感じになりますし、CLは
3、40人で行っているというような状況です。
20年前と今ではスタイルも違うし募集方法も
全然違うというのが私の感じた20年と+5年
くらいです。





第2部 「これから」を語る — 2020年を超えて

中塚 第1部ではサロンが歩んできた20年をいろんな角度で見てきましたが、第2部は、これから開催される2つのメガイベント、2019年のラグビーワールドカップと2020年の東京オリンピック・パラリンピックを中心に取り上げていきます。

2019年ラグビーワールドカップの概略 (嶋崎雅規氏)

嶋崎 サロンで理事をやらせていただいております嶋崎と申します。サッカー関係の方が多く中で、私はどっぷりラグビーです。中学3年生ぐらいからラグビーを始めて、その後も高校・大学で、今は大学でラグビー指導をしております。まず、画面の写真ですが2015年9月の「ブライトンの奇跡」と呼ばれている、南アフリカに勝った試合の後の日本代表の写真です。この時は

本当に盛り上がりました。2015年ワールドカップですね。五郎丸のトライや最後の逆転のトライ、そして歓喜の渦です。この年のトップリーグ、15-16シーズンは観客も非常に増えて、ラグビーもいよいよ19年に向けて盛り上がってきたか、という勢いだったのですが、1年経ちますと16-17シーズンは観客動員が減りまして、厳しい状態になっています。

2019年ワールドカップの概略について、ご存じない方が多分ほとんどだと思いますのでお話をさせていただきます。大会は2019年9月20日から11月2日にかけて、長丁場です。約40日以上かけて行われます。出場は20チームです。試合形式は5チームを4プールに分け、総当たりで40試合行います。各プール上位2チーム・8チームでの決勝トーナメントが行われます。3位決定戦含め8試合、合計48試合が行われるということになります。既に予選プールの組分けが決まっています。プールAに日本は入って

いまして、このプールは、アイルランド、スコットランド、ヨーロッパ地区はほぼ決まっています。ルーマニアだろうと予測されています。それからおそらくサモアが入ってくるだろうと言われています。

プールBはニュージーランド、南アフリカ、イタリア、アフリカ地区からはおそらくナミビアが入ってくるだろうと言われています。敗者復活はヨーロッパの敗者であるスペインが上がってくるだろうと言われています。

プールC、これは1番厳しい組になっています。イングランド、フランス、アルゼンチン、アメリカ地区1位はすでにアメリカが決定しています。オセアニア地区2位はトンガが入ることが決まっています。プールCがおそらく1番厳しい死の組と言われています。

プールDがオーストラリア、ウェールズ、ジョージア、オセアニア地区1位のフィジーが既に決まっています。アメリカ地区2位はおそらくカナダが入ってくると予想されています。予選を通過して出てくるのは下の8チームだけです。上位12チームは前回大会の結果によって出場が決まっています。日本も前回プール戦で3位以内、12チーム以内に入りましたので既に予選はなくここに入っています。

これを全国12都市で開催します。札幌、岩手の釜石、埼玉の熊谷、東京、横浜、静岡、愛知県の豊田、東大阪、神戸、大分、熊本、福岡の全国12都市で開催します。

それぞれスタジアムも決まっております。札幌ドーム、1番話題になっているのは釜石ですね、釜石鶴住居復興スタジアム、震災の津波を受けた被災地の上に

新しく競技場を作ってここで競技を行おうということです。釜石はご存知の通り新日鉄釜石で有名なラグビーどころです。熊谷ラグビー場は24,000となっております。ワールドカップ時には6,000の仮設スタンドを作って30,000人ということになっています。

東京は味の素スタジアム、横浜は日産スタジアム、静岡はエコパ、豊田スタジアム、大阪は東大阪市の花園ラグビー場、ノエビアスタジアム神戸、レベルファイブスタジアム、大銀ドーム、えがお健康スタジアム、というように競技場も既に決まっています。

どの試合をどこでやるのかは、試合の収容人数とカテゴリが決まっています。開幕戦、準決勝、3位決定戦、決勝は6万人以上となっています。6万人以上は横浜だけなので、開幕戦は味の素スタジアムで行われることが決定しています。決勝戦は横浜に決まっています。そして日本とティア1のゲーム、ティア1と言うのは世界ランク10位以内のチームで、北半球のイングランド、アイルランド、ウェールズ、スコットランド、イタリア、フランス、南半球のニュージーランド、オーストラリア、南アフリカ、アルゼンチンの10チームがティア1というふうに使われているのですけれど、この国と日本の対戦の場合には4万人以上の競技場でやりなさいということ、おそらく日本のアイルランド、スコットランドとの試合は大きなスタジアム、豊田スタジアムとか札幌ドームで行われるのではないかと予想されます。

キャンプ地はすでに公募が始まっています。実際にチームが秋以降視察に訪れて、来年には決定することになります。公認のキャンプ地については滞在中

のチームの移動費宿泊費等については組織委員会で負担をすることになってはいますが、事前キャンプについては組織委員会は関与しません。自治体とチームが直接交渉して費用についてもチーム負担ということになっています。2015年のワールドカップの時、日本代表チームは、事前キャンプはブリストル、そして公認のチームキャンプ地としては、ブライトン、ワーウィックで行った実績があります。実際に立候補しているのは76件です。この中からキャンプ



(左から黒崎氏、嶋崎氏、名方氏)

候補地が選ばれ、チームの視察の後にキャンプ地が決まるということになっています。

さあ2019年のワールドカップに向けて日本ラグビーはどうあるべきか。1番大事なのは代表チームの強化です。開催国が決勝トーナメントに残らない、実は2015年イングランドは残れませんでした、そういう事は滅多にないわけです。最低ベスト8以上ですね、これが条件になってきます。そのためにサンウルブスというチームを結成してスーパーラグビーに参戦をしています。

もう一つはファンの増加です。観客でスタジアムを埋め尽くさなければペイできません。開催国として赤字になってしまいます。ですからラグビーファンを増やすということが非常に重要で、トップリーグあるいはスーパーラグビーのサンウルブスの観客増が重要になってくるのではないかと思います。それからジュニア層への普及です。スクールや中学生年代の、ジュニア層への普及が非常に大きな問題になってくると思います。もう一つは大学ラグビーの問題ですが、これは今日は省かせていただきたいと思います。

では日本協会は何をやっているかと言いますとエリートプログラムです。男子についてはユースアカデミー、中3から高3まで集めて行っています。それからブロックごとにトレーニングセンター、これはサッカーと一緒にです。トレセンシステムで高校1年生、2年生、U-17でブロックトレセンを開催しています。タレントIDプログラムと言って、高校2年生から大学2年生を集めて、20歳以下の世界大会、ジュニアワールドチャンピオンシップに向けてのU-20のチーム作りのためにやっています。それから女子のほうも中3から高3でユースアカデミー、ターゲットエイジの育成強化に加えて、種目転向プロジェクト、大学生以降の陸上やバスケットをやっていた選手をラグビーに転向させるというプロジェクトを行っています。

一方でディベロップメントプログラムとして普及の活動もしています。学校への普及やラグビースクール・ジュニアスクールへの普及です。要するに学校だけではなくて地域でラグビーをできるような受け皿を作ろうとしています。小学生ではジャンボリーの大会を開いたり、中学生でも全国大会が開かれるようになりました。

そして1番大事なのは指導者の育成です。有資格者をチーム登録時に義務化するというようなことも行われています。JRFU放課後ラグビープログラムとし

て、平日の放課後、学校やチームの枠を超えてラグビーをする。主に中学生ですね。実は中学にラグビー部があるところはほとんどないので、スクールで小学校の時にラグビーをやっていたけれども中学でラグビーをする場がないという子たちの受け皿として2019年ワールドカップの開催都市12地域を中心に、このようなプログラムを日本協会が展開しています。

最後に、トップリーグの逆襲と言う、ネットで流れている動画をご覧になっていただきたいと思えます。トップリーグの観戦者を増やすための動画です。ありがとうございました。

文京ラグビースクール（名方幸彦氏）

中塚 なかなか2019年ラグビーのワールドカップについて知る機会はないのですけれども、嶋崎さんにざっと説明していただきました。今日は日曜日ですが、実は毎週日曜日の朝から11時ぐらいまで、このグラウンドで文京ラグビースクールというのが展開されています。私も日曜日にDUOリーグの試合をすることが多いのでよく立ち会うのですが、まさに話がありました2015年のワールドカップあたりからものすごく参加者が増えているというのを目の当たりにしています。その中心になって展開されている名方幸彦さん、文京ラグビースクールについてお願いします。

名方 文京区に住んで20数年になります。2001年にNPO法人文京教育トラストを設立しました。私が49歳の時です。その当時から人事コンサルタントを、今も細々とやっておりますけれども、地域を変えないと日本は変わらないだろうと非常に高い理想を掲げて、この文京区の地域ですとやっております。また文京ラグビースクールを2013年に、山手線の中では2番目ですが、小石川高校ラグビー部OB、筑波附属校ラグビー部OB、そして東大ラグビー部OB中心に立ち上げました。まだ4年目ですが、今日も筑附のグラウンドをお借りして8時半から11時まで、102人の幼児、小学生から中学生まで、スタッフコーチが34人、で実施したところです。

サッカーと違うところは2つくらいあって、まずやたらにスタッフが多いこと。大体5人に1人くらいのコーチですから手がかかる。もう一つは、ほとんどの人がボランティアです。サッカーの場合だとプロコーチだけでなく、スタッフの経費を払いますが、もちろんラグビーもプロの人がいるのですが、日頃の運

営をしているのはほとんどボランティアのスタッフです。これが大きな違いかなと思います。

中塚先生との出会いは、今から17年ほど前で、最初は少年サッカークラブでした。隣のグラウンドでやっていたら声かけていただいて、サロンに入ったというようなきっかけでした。

本日言いたいことは5分しかないので一つです。

おそらく2020年ではなくて2022年、大きく時代が変わると思います。なぜ変わるのかと言うと、今日の参加者を見るとシニアの人、私に年齢の近い人が多いですね。ひとつテストをしてみましょう。1868年に何がありましたか？

客席 明治維新。

名方 では若い学生の人、1945年は何ですか？

客席 終戦？敗戦？

名方 では1945から1868を引くと何年ですか？暗算の強い人、答え出ました？答えは77年です。じゃあ1945に77を足すといくつになりますか？2022、そうなんです。2022年。2022年が大きな転換期になると想定します。例えば、私が18歳の時、18歳人口いくらだったかってご存知ですか？1960年頃約200万人いたんですよ。今は18歳人口どれくらいだと思いますか。100万ちょっとで半分です。文京区のデータを見ると小学校2年生まではずっと増えています。しかし小学校2年生から以降はぐっと減っています。という事はあと5年間は小学校は増え続ける。だけどその後はずっと減ります。

人口が減ることに対してどうやっていくかが大きな課題です。私の現状の回答は、会社人間が終わった人をボランティアで活用できないかということです。私は50歳から初めて17年経ちました。2022年までやれるかどうかわかりませんが、もうちょっと頑張りたいなということで、今日は貴重な5分をい



ただいて、ありがとうございました。

港ラグビースクール（黒崎祐一氏）



中塚 名方さんからはお手元にビヨンド2020という資料が配布されていますので後ほどご覧ください。ここまではあらかじめお願いしていた指定発言者なのですが、黒崎さんから、今どういったことをされているのかということをご披露いただけますか。

黒崎 2014年の3月にスポーツクラブの法人化を語ろうということで、サロン2002に初登壇させていただきました。港ラグビー協会会長で港区議会議員しております黒崎祐一です。

どうすれば地域とスポーツがそして文化がつながっていくのか、医療、福祉、介護、教育、子育て、いろんな問題がある中でスポーツの優先順位は地域において非常に低いです。場所もないです。ただ場所があれば、先程の文京ラグビースクールもそうですが、私たち港ラグビースクールでも日曜日、今日も子供たちとやっています。火木の夜も小学校を貸してもらってトップアスリート、元日本代表選手によるアカデミーができてます。やっぱり場所が必要なんです。これをどう作っていくか、東京には場所がないけど人がいる。地方は場所はあるけど人がいない。これはどう解消していくかという事はまさにみんなで考えていかなければいけない政治の問題だと思います。ただ都心部にスタジアムがあれば、課題はほとんど解決すると思います。

働く人、住む人、訪れる人、それが一体となるまちづくりはスポーツしかないと思います。私もここまでいぶん時間もかかりましたが、これを日本のワールドカップのレガシーとして、そして日本オリンピックのレガシーとなるように。港区には秩父宮と言う聖地があります。これを残してしっかり日本のラグビーを検証する場所を作っていこう、そんな活動しております。

掛川のサッカークラブ（伊藤 薫氏）

中塚 先ほどワールドカップの開催地に掛川のエコパが載っていましたが、ちょうど掛川からお越しの伊藤薫さん。その地域でサッカークラブをずっともう20何年、30年ですか。やっておられます。むちゃぶりとなりますが、掛川の様子とご自身のクラブの宣伝も交えながらお願いします。

伊藤 掛川から参りました伊藤と申します。中塚先生との出会いは、JFA ニュースで、心理学とか社会学がサッカーに入ってきたんだなと言うことにびっくりして、一度お会いしたいなと思ったのがきっかけです。1997年か8年頃だったと思います。それまではJFA ニュース、サッカーの機関誌のほとんどは大会の結果とか、トレーニングメニューとかで、研究者による社会学、心理学の記事はとても珍しくて、さらに中塚先生の描いている将来的なビジョンであるとか、高校生・中学生がこうありたいとか、指導者像はこうだなというのが私の中でとてもヒットしたんですね。というのは、私は35年前にヤマハサッカースクールで指導に携わっていました。

当時オフトが日本に来て2年目だったと思うんですが、ヤマハにおられて、日本のサッカーの指導者、サッカークラブの理念とかがヨーロッパと全然違うという話を間近に聞いていました。そのことと中塚先生が書いているのが全く同じだったんですね。指導者はベンチで微笑みながら指導した方がいい。子どもたちは引退しない方がいい。クラブには必ず理念が必要だ。企業の宣伝のためにクラブがあるわけではない。地域のコミュニティを広げるためとか、いろいろ書かれている。

直接聞いたり、中塚先生の本を読んだりして、クラブを立ち上げたのは1989年です。立ち上げた理由は、サッカーで飯を食いたいなと思ったことでした。今も志はスポーツを産業にしていきたい。それから思想作りという二本柱なんですけども、スポーツを産業にしていきたいと思いながらやってるなかで、いろんな壁に当たった時に、中塚先生に掛川に出張サロンということで来ていただきました。公共性とクラブ運営という大きなテーマでやっていただきました。

まだまだ文科省とか学校とかではお金をいただいて指導するのはおかしいというナンセンスだったころですね。でも今は月会費8000円いただいて小学校のグラウンドとか公共のグラウンドを使わせてもらっています。

会員が640名で年間の売り上げが7200万くらいで正規社員が6名、アルバイトが18名で、総勢24名くらいで切り盛りしているんですけど、目標は1億円を目指そうと。利益は地域に還元しよう。事業に還元しようというのと、それから子どもたちにも還元しようということをやっています。



話は前後するんですけど、鹿島アントラーズの社長からJリーグの社長になった大東和美さんが、鹿島の理念は片手にそろばんで片手にロマンだ、この両方がないと社員のモチベーションも上がらないし企業としての成長もないということを書かれていたのを随分昔に読んだんですけど、今まさに私もそれをやっているところです。そろばんをはじけなかったらロマンなんかでてこないし、ロマンばかり追ってたら社員の満足度も上がらないということで、その両面をうまくやらないといけないということをやっています。

突然に中塚先生の方から振られましたので、なんの話をしていいか、取り留めもない話だったんですけど僕はとても中塚先生に刺激されて、今回も来させて頂きました。また今日、改めて会員にならせて頂きましたので、年会費1万円ということでよろしくお願いします。

日本のオリンピック・パラリンピック事業（勝又 正秀氏）

中塚 ありがとうございます。もう一つの大きなトピック、2020年東京オリンピック、パラリンピックに進めていきたいと思います。3名の方にそれぞれ5分ずつで、指定発言者としてお願いしてあります。まず、勝又正秀さんです。日本のオリパラ事業のど真ん中にいらっしゃる方で、スポーツ庁オリパラ課の課長さんです。実はそれより前にこの学校でお会いしているのが最初のつながりです。ではよろしくお願いします。

勝又 スポーツ庁オリンピック・パラリンピックの勝又です。私がここで中塚先生とお会いしたのは今から3年前でした。筑波大学附属高校サッカー一部の保護者会でした。保護者会に行ったらやけに熱く喋っているオヤジがいるんですね。僕はもともとサッカー好きですし、静岡で生まれてサッカーに馴染んで育った



ということもあったので、非常に熱っぽいお話に感銘を受けました。東京師範の話からはじまって、2時間ほどでしたが実りある時間でした。

当時、私は単身赴任中で高松市の市役所に出向していました。高松市で何をやったかというと、カマタマーレ讃岐というJ2チームの非常勤の役員で、非常に苦しんだころでした。本日お集まりの皆さんは相当サッカーやラグビーに親しんだ方が多いようですが、私自身はその市役所でかかわって過ごしたということはあるんですけども、スポーツの仕事をしたのはスポーツ庁のオリンピック・パラリンピック課が初めてでした。入ったのは建設省庁という役所でした。そこで役人をやっているうちにスポーツ庁ができて人も動かして、いろいろな役所から集まってきたスタッフの1人になりました。このサロン2002の理念がスポーツを通じて豊かな暮らしを実現するということなので、東京オリンピックの2020大会を通じて我々はどんな暮らしを実現したいかということをお話させていただきたいと思います。

東京オリンピック・パラリンピックが2013年9月に決まりました。本当にうれしかったですよね。私もまさか今こんな仕事をするなんて思ってなかったけれども純粋にうれしかったです。それからちょうどまる4年経ちます。4年経ったけど進んでいる感がないという印象を持っている方が多いのではないかと思います。この間、東京オリンピック・パラリンピックが誘致できたからというのが非常に大きいですが、2015年にスポーツ庁ができました。新国立競技場は、1300億くらいでできる当初の計画が2500億円くらいかかるというようなことになって、計画見直しをいただきたい1500億円でできることになっています。最近の話題では、東京オリンピック・パラリンピックの総経費が1兆3850億円ということです。これだけのお金が、さて将来に何を残していくか、

ということをお我々は考えていかなければいけない。それを説明できないと東京オリンピック・パラリンピックの意味がないんだと思っております。そこで何かと原点に立ち返ると、オリンピック憲章だと思えますね。オリンピック憲章に「オリンピズムの根本原則」と書いてあります。皆さんもご存知の方が多いと思いますけれども、最初に「オリンピズムはスポーツを文化、教育と融合させ、生き方の創造を探求する」と書かれています。まさにこのサロン2002で言っているスポーツによって豊かな生活を実現するということです。それから差別のない世界だとか、平和とかということがしっかりと書かれています。特に今回、オリンピックとパラリンピックを並べて書いてあります。1964年大会は東京オリンピックという印象が強いんですけども、実際は第2回パラリンピックが東京で行われました。パラリンピックが2回開かれる都市は東京が初めてです。パラリンピックの意味を強調することが2020年大会の重要な役割だと思っております。

政府は役所なので、こんなものをつくるのですが、オリンピック・パラリンピック基本方針というものをつくりました。レガシーが何か、どんなレガシーかということをしかりと考えて、ここに書いてあるように、共生社会だとか日本文化の魅力、国際貢献等々といったレガシーを残していくということが2020年大会の重要な意味かと思っております。私に与えられた題が何を残すべきかと言うことで、こういったスライドを用意して参りました。64年大会のレガシー、もう皆さんご存知のようにこのようなことです。国立競技場、日本武道館、あるいは敗戦からの復興、新幹線、首都高速道路ということでハードの部分が多かったんじゃないかなと思います。それから体育の日ができて、これからみんなで広くスポーツをやっていくというようになった、ということかなと思います。

2020年度には残していくかということ、ここに書いてあるように、今のわが国の置かれた現状を考えると、東日本大震災からの復興ということが大きいですね。少子高齢化で社会保障費が増大し、そうはいつても昔と違って国にもお金がない、そこでスポーツ庁ができました。結論は明らかだと思います。2020年大会のレガシー、それは若者からお年寄りまでみんながスポーツをする社会、それはよくうちの上司の鈴木長官も言うんですが、「スポーツをする人は健康で長寿できる。それは医療費を削減してこれからの少子高齢化、それから財政苦しい中で、我が国の持続可能性に

つながるんじゃないか」と言うことだと思います。それとパラリンピックだと思います。パラリンピックを成功させて、共生社会、多様な人たちが生きやすい暮らしやすい社会を作る、それがこの東京大会で残すべきレガシーではないかなと思います。これは勝手な問題提起なので、皆さんそれぞれ2020年大会が何を残すべきかということは思い入れがあるでしょう。このあと懇親会でもお話しさせていただければと思います。どうもありがとうございました。

スポーツ庁の「競技力強化のための今後の支援方針」など（川井寿裕氏）

中塚 同じくスポーツ庁競技スポーツ課長補佐の川井寿裕さんです。古くからいらっしゃる方にはお馴染みの、サロンのレジェンドの1人です。totoの立ち上げの頃、深く関わっておられました。巡り巡って今のお立場からのコメントをお願いします。

川井 サロンとは最初の活動の頃からお付き合いさせていただいています。toto（スポーツ振興くじ）の立ち上げ時に当時の文部省におりまして、totoを通じて、このサロン2002と出会いました。2000年から2008年にかけて名簿担当や、会費を徴収する会計担当として、いろいろと一緒にやらせていただきました。簡単に名簿担当と言っても、これがまた結構大変で、単なる名前を五十音順で作成するというわけではなくて、読み物として名簿を作りたいというご意向があって、編集するのも大変でした。

先ほど勝又課長からは政府が2020年東京大会に向けて取り組んでいる全体の状況をお話いただきましたが、私からはトップアスリートの強化への取組状況についてお話しします。トップアスリートの強化については、私どもが直接強化をやっているわけではなく、競技団体が強化活動を行っていますので、競技団体の強化活動をどうやってサポートしていくか、どうやって支援して行くかということをやっています。

2013年度以前、私は岡山大学の財務企画や、国立青少年教育振興機構で青少年の体験活動などスポーツとは違う世界で仕事をしていたのですが、2012年のロンドンオリンピックが終わった後の2013年に文科省に帰ってきました。役人は2、3年で配置が変わるんですけど、2013年9月に東京開催が決定したこともあり、私は現在まで同じ課に所属して強化支援に関する仕事をしています。東京開催決定以降、トップアスリートの強化に関する施策は凄まじいスピードで展開されてきており、これまでそれらの取組に関わってきましたので、本日はその内容を簡単に紹介したいと思います。

東京大会開催が決定した次の年の2014年にパラリンピック競技を含む障害者スポーツの所管が厚生労働省から文科省に移管され、オリ・パラのトップアスリートの強化については文科省で一元的に取り組んでいくことになりました。その後、トップアスリートにおける強化・研究活動拠点の在り方について、オリンピックの関係者とパラリンピックの関係者が1つのテーブルについて一緒に議論する会議を設置しました。これは、我が国のトップスポーツの強化をオリ・パラ一体で進めていくという方向性が決定した歴史的な会議であったと思っています。2015年にはこの会議の最終報告を取りまとめ、NTC（ナショナルトレーニングセンター）の拡充整備、既存のNTCとJISS（国立スポーツ科学センター）のオリ・パラでの共同利用、NTCとJISSの機能を統合強化したハイ



（左から川井氏、勝又氏）

パフォーマンスセンターの構築などが盛り込まれました。これを受けて、NTCの拡充棟は約220億円の予算をかけて整備することが認められ、2020年東京大会の約1年前には利用できるよう、現在着々と整備を進めています。また、2015年には、補助金、国の直轄経費、スポーツ振興基金などからの様々な強化のための経費が「競技力向上事業」として一元化されました。もちろん、長年関係者から待望されたスポーツ庁の発足は歴史的な出来事でありました。

2016年にはリオ大会が開催されましたが、本日はお話ししたいのは10月3日に制定された「競技力強化のための今後の支援方針」、いわゆる鈴木大地長官による「鈴木プラン」です。このプランは5つの柱から構成されており、オリ・パラ一体、夏季競技と冬季競技共通で進めていくこととしています。その中でも1番重要なのは、「中長期の強化戦略プランの実効化を支援するシステムを確立」するということです。2020年東京大会を成功させるためには、日本選手の活躍が必要不可欠であります。それだけではなく、2020年までに2020年以降を見据えて強力で持続可能な支援体制をいかに構築するかということに着目しています。

先ほど「レガシー」という話がありましたけれども、2020年東京大会が終わった時に、強化の面でもきちんとしたソフトレガシーを残していこうというのが大きな目標の1つです。これには、まずしっかりと強化戦略プランを競技団体が策定し、それを実践して、見直して更新していくというPDCAサイクルを構築することが重要ですし、各競技団体とJOC(日本オリンピック委員会)、JPC(日本パラリンピック委員会)、JSC(日本スポーツ振興センター)が強化活動やその活動を支援する取り組みをバラバラにやるのではなく、協働チームとして強化戦略プランの策定段階から一体になってやっていく、競技成績のみを強化費の配分に反映させるのではなくて、今どういう取り組みを行っているのか、そして4年後、8年後の将来に向けてその取り組みをどうつなげていくのかというプロセスや取組を積極的に評価して、強化費等の資金配分や集中的・重点的に実施する事業の対象競技の選定等に反映させていこうというシステムを構築し、2020年以降も引き継いでいくということが重要です。

そして、2020年東京大会に向けた戦略的支援として、2018年までは「活躍基盤確立期」として全ての競技のパフォーマンスが上がるように支援していくこととしていますが、2019年から2020年にかけて

は「ラストスパート期」としてメダル獲得の最大化にフォーカスして一定の選択と集中を図り、強化支援を柔軟かつ大胆に重点化することとしています。2020年東京大会の開催は、強化の面においても非常に重要な機会となりますが、2020年以降をしっかりと見据えて取り組んでいくことが重要と考えています。本日はありがとうございました。

スポーツを通じた国際貢献「Sport for Tomorrow」(岸 卓巨氏)

中塚 こういう説明を国の省庁に勤めておられる方から直接聞く機会というのはなかなかないと思います。では3人目、川井さんから会計とか名簿とかを受け継いだ岸事務局長です。スポーツ・フォー・トゥモロー・コンソーシアムの事務局でスポーツを通じた国際貢献に関する仕事をされています。

岸 サロン2002の事務局長を務めています岸と申します。今31歳ですが、中塚理事長と出会ったのは私が都立小石川高校に通っている時にDUOリーグに選手として出場していたことがきっかけです。当時、審判講習会の運営を手伝ったり、DUOリーグに選手だけではなくて事務局という立場で関わらせていただくようになりました。その中でサロン2002というのがあるんだということを教えていただき、川井さんから名簿・会計担当を引き継いでからかれこれもう16年ですね。このサロン2002では毎月例会とすることでいろいろなテーマで様々な方をお呼びしてお話をいただいておりますが、その中であまりサッカーになじみのない国、例えばバヌアツやケニアなどの名前が時々出てきますが、それは私の方でお話させていただいております。大学時代からスポーツをツールにした社会課題の解決に非常に興味があってバヌアツ共和国と言うオーストラリアの近くの島国でホームステイをしたり、大学卒業後は東日本大震災のボランティアをやったり、ケニアで青年海外協力隊として活動しておりました。例えば東日本大震災のときには歌津中という南三陸の中学生と東京の中学生の交流試合をしまして、そこにもサロンの皆さんにご協力いただきました。あるいはケニアで活動している時は私は現地の児童鑑別所で窃盗から殺人まで様々な子どもに対してスポーツを教えたり勉強教えるという活動していましたが、サッカー大会を開催し地域住民を集めて、そこで環境や健康などについて考えてもらうイベ

ントもしておりました。協力隊はなかなか現地で活動する費用はないんですが、クラウドファンディングなどいろいろな形でサロンの皆さんにご協力いただきました。

スポーツ開発学やスポーツを通じた途上国支援の分野で、この20年を振り返りますと国連でも「ミレニアム開発目標 (MDGs)」が2000年に作られ、2015年までの目標としてスポーツで何ができるのか国連の中でも語られるようになりました。例えば教育に関しては、学校でスポーツをやる機会を設けることでスポーツが楽しくて学校に来る生徒が増えるであるとか、例えばSONYさんであればガーナあるいはコートジボワールでワールドカップの時にパブリックビューイングを開いて人を集めて、そこで集まった人たちに予防接種をしたりだとかエイズの検査をしたり、そういうような世界の開発目標とスポーツを結びつけた活動が行われています。その中で今2030年に向けてMDGsから「持続可能な開発目標 (SDGs)」に目標が移ってきております。国連でもこんなことが語られておりますが、日本でも世界の動きに合わせて「スポーツ・フォー・トゥモロー (SFT)」という事業が進んでおります。

この事業は、勝又課長のスポーツ庁オリンピック・パラリンピック課から我々日本スポーツ振興センターが事務局を受託しています。SFTはオリンピック・パラリンピックの招致活動の時に安倍首相が、日本がホスト国に選ばれれば、2020年までに100カ国1000万人以上にスポーツの支援をします、ということ掲げてスタートしたものです。目指すものとしては例えばスポーツの普及、スポーツの用具がなくなかなかスポーツができない人たちにスポーツの用具を提供したり、日本でのトレーニング環境を提供したり、あるいは開発と平和のためにスポーツを使っていく、あるいはスポーツ交流を行っていくなどが挙げられています。SFTを推進するためのネットワークも作られ、現在337団体が加盟し、毎月増えております。サロン2002も2016年1月に入会しています。サロン2002でどんなことやっているかと言いますと、例えばノ

ンボーダーフットボールプロジェクトという人種・性別・年齢などを越えてサッカーを通してかかわれる機会をつくるプロジェクトを行ったり、これは外務省が発起人になったことですが、難民キャンプにサッカー用具を送ろうということでDUOリーグあるいはサロン2002のメーリングリストで呼びかけてボールやユニフォームを提供しました。サロン2002では、ネットワークを生かして、このようなスポーツを通しての国際貢献も行っています。これまでサロン2002にかかわらせていただいて本当に多くの方と関わることができました。これからもこのネットワークを発展・活用していければと思います。

シンポジウムを振り返って

中塚 皆さんから中身のある話を、みんな5分以内という厳しいリクエストの中で展開してもらいました。仲澤さん、宇都宮さん、鈴木さんに、これからというところにも言及しながら今日1日を振り返っていただけないでしょうか。

宇都宮 今日は皆さん長いお時間ありがとうございました。まず20年と言う振り返りで考えると、私がこの仕事を始めると言いますか、フリーランスになったのは今からちょうど20年前でして、その20年とサロンの20年は非常に重なります。逆に言うとサロンとの出会いがなかったら本を出すこともなかったでしょうし、サッカーに携わる人との出会いがなかったら今まで仕事を続けることもできなかつたろうなと思いました。そう考えるとサロン2002にはほんとお世話になりっぱなしで、今日はほんの少しは恩返し



できたかなと思っております。20年に一回と先ほど中塚先生がおっしゃいましたので、次やるときは40周年ですか、先生そのときおいくつになられてます？

中塚 もう定年は過ぎてます。

宇都宮 私も50を過ぎて感じるのは、次の世代に何を残すかということで、今日はレガシーという言葉が何度も出てきましたけれども、今後はサロンもそうだし私自身も、そっちのほうにシフトして行くべきなのかなと最近よく考えます。まだまだこの仕事を続けるつもりでいますけれども何を残すかという事はこの国全体が考えることだしサッカー界も考えることであると同時にサロンとサロンのそれぞれの人が考えるべきなのかなということを改めて感じました。今日はどうもありがとうございました。

鈴木 今日はありがとうございました。貴重な機会でした。スタッフの方々、設営も企画も資料も、行き届いた準備をさせていただきありがとうございました。皆さんからも拍手をしていただけたらと思います。今日はIT技術の上澄みだけをお話ししましたが、仲澤さんもおっしゃられたように、これから世界が大変なところに向かっていくと思います。世界の人口がこのままが増え続けていくと地球2個分の資源が必要になると言われています。2050年にはそういう世の中が来る。つまり今のインフラやエネルギーをものすごく効率的に使うこと、そのために知恵を集めて技術をうまく使う必要がある。仲澤さんの話のもうひとつの大事なことは、地方に人がいなくなる、そして世界的に人口増える一方で日本の人口が減っていくとき、例えばたくさんの人に合わせて作ったインフ

ラをこれからどう維持し、安全に、効率的に使っていくか？これは本当に大変な話です。

スポーツ界もそれと無縁ではなく、日本は長く「国体文化」のなかでスポーツが振興され、競技場が作られたりしてきましたが、作って数十年経って老朽化した競技場のインフラがこの先も大丈夫だという保証はまったくありません。トンネルの崩落事故のような悲惨な状況を招かないように、スポーツ施設も確実に、しかも人手をかけないで維持・管理していかなければならない。いま、コンクリートの表面の画像から中身の診断ができるといった技術がどんどん実用化されています。これからの大きなスポーツイベントを控えて、いろんな技術がいろんなところで使われる。2020年はそのショーケースのような意味合いがあると思います。

仲澤 私たちの世代(50代)は「ゆでガエル世代」でもあるそうです(日経ビジネス, 2016年8月8・15日号)。カエルが冷たい水から茹でられていると気づいたときには茹で上がって死んでしまう。最初からボイルドされているお湯であれば「あちち」と言うことですぐに逃げるので生きていける(=変化に対応できる)と。この20年、気がついたら、ゆであがっていたら(=時代に取り残されていたら)、本当に周囲に迷惑な話だと思います。そのため、最近では自虐的に「いま、傾聴ボランティアタイムになってない？」などと、私の言っていることが30代とか20代の人たちの腑に落ちるのかを気にしながら、院生や学部生と関わっています。今日のごこまでの時間でも「さすが中塚先生のDNA的なところを基礎にした

ネットワークなんだなあ)、(だから)「きれいにまとまらないで当たり前なんだなあ」という感じで聞いていました。いい意味で遠慮のない主張が交錯し、新たに、より意味のある主張を生んでいたようでした。率直なところ(ロジックが後からついてくるようなデータ依存の研究が評価されない頃に院生だった)中塚先生に「ビックデータをセンシングして、アナライズして、云々…」をわかるよう促すことは、私にはなかなかできません。ただ、ゆでガエルと揶揄しながら



(左から宇都宮氏、鈴木氏)


20周年記念シンポジウム「Before2002 After2020」第2部

らも、何とか若い人たちの役に立ちたいということは、いつも思っています。

例えば「格差是正は誰の仕事？」みたいな課題に対処していくことは、(実感はあまりないのですが、バブルを謳歌したとされる)ゆでガエル世代の責任であるように思います。2020年の東京五輪大会は大きな夢を描けるものですが、五輪種目でない種目に対する格差は誰が埋めてくれるのでしょうか。五輪種目に入れば、いろんなスポーツ財源の競争に参加できるけど、そうでない種目は誰が面倒をみるのか、などという課題はわが国のスポーツには重要です。先ほど、お話にあった toto 助成を考えても、国際競技力の実績や中長期のプランニングなど NF (国内統括中央競技団体) の機能レベルがまさに問われていきます。それに呼応するように、NF間の格差は大きくなっています。

例えば、サッカーの競技団体 (JFA、Jリーグ) は 1991 年の年間予算が 20 億ほどでしたが、DAZN (ダゾーン) が来る前でも 300 億程度 (DAZN 契約後は約 450 億)、25 年間で 15 倍くらい膨れたわけです。そうすると各都道府県にトレセンをつくっていくとか、女子やユースの強化を拡充しようとかができます。スポーツ・フォー・トゥモローの報告にあった、スポーツの持つ力 (社会的影響力) は、とても強いというのも事実で、国連が掲げている理念に向かっての活動 (格差是正への取り組み) が進んではいますが、いつも気になってしまうのは、格差是正のアイデアがど

うやったら社会の隅々まで実行性を持てるのであろうか、などというところです。こういう話が出るのも、このネットワークのよいところだと思っています。これからも勉強させていただきたいと思っていますので、どうぞよろしくお願いいたします。

中塚 どうもありがとうございました。20周年ということで、どの20年を切り取っても多分激動の20年ということになるんでしょうが、やっぱり当事者として関わってきているこの20年というのは何か特別感があるなあと、いろいろな面でね。そういうのを改めて感じました。そして、このまとまらない感で、集っているこの人たちっていうのが非常に魅力的で、やっぱりこれがいろんな意味でパワーの源にもなっているのかなと。こういうネットワークをこれからも大事にしていきたいと思っています。これからずっと続けていくと、おそらく年齢幅がどんどん広がっていくと思います。サロンに引退なし、生涯現役。だからといって年寄りがいつまでも居座ることではなく、新しい人たちにいろんなことを委ねながら活性化し、それでまたいろんな人たちのステーションとなって、困ったらサロンと言う感じでいろんなヒントを出しながらもらいながら、これからスポーツを通しての豊かな暮らしに貢献していければと思います。長時間に渡りましたが以上でシンポジウムをおしまいにさせていただきます。どうも皆さんありがとうございました。 



当日配布資料

170827 公開シンポ補足資料

年表: サロン2002のあゆんだ20年

- 1991年11月 社団法人日本プロサッカーリーグ設立
- 1992年 バルセロナ五輪
- 1993年5月 Jリーグ開幕、8月 FIFAU-17世界選手権
11月 「ドーハの悲劇」/韓国も2002年に立候補
- 1994年 FIFAワールドカップ・アメリカ
「フットサル」元年。各都道府県フットサル委設置
- 1995年 総合型地域スポーツクラブ育成モデル事業開始
- 1996年4月 DUOリーグ(都内のユースサッカーリーグ)開幕
5月 2002年FIFAワールドカップ日韓共催決定
7月 28年ぶり出場アトランタ五輪で「マイアミの奇跡」

1997年 サロン2002として活動開始

- 総合型地域スポーツクラブ育成モデル事業開始
11月 「ジョホールバルの歓喜」
- 1998年 FIFAワールドカップ・フランスに初出場
- 1999年 Jリーグ1・2部制(J1・J2)を導入
- 2000年 シドニー五輪
- 2001年3月 toto全国販売開始
8月 東京FA公認U-18フットサル大会始まる
- 2002年 FIFAワールドカップ韓日大会
- 2003年9月 ラグビー「トップリーグ」開幕
- 2004年 アテネ五輪
- 2005年1月「JFA2005年宣言」、5月日本サッカー殿堂創設
- 2006年4月JFAアカデミー創設、6月FIFAW杯ドイツ
- 2007年9月フットサル「Fリーグ」開幕
- 2008年 北京五輪
- 2009年 2019年ラグビーW杯日本開催決定
- 2010年 FIFAワールドカップ・南アフリカ
- 2011年3月東日本大震災
6月 スポーツ基本法公布(8月施行)
7月 なでしこジャパンFIFA女子W杯優勝
- 2012年 ロンドン五輪
- 2013年9月 2020年東京オリ・パラ開催決定
- 2014年4月 J3リーグ開幕
5月 **NPO法人サロン2002設立総会**(10月登記)
6月 FIFAワールドカップ・ブラジル
- 2015年9月 ラグビーW杯で日本が南アフリカに勝利
- 2016年8月 リオデジャネイロ五輪
9月 バスケットボール「Bリーグ」開幕
- 2017年 DAZN(ダゾーン)によるJリーグの動画配信開始

サロン2002のあゆみ

JFA科学研究委員会のサブグループ「社・心グループ」が前身
(1980年代後半から定期的に活動)

- ◆サッカー界の劇的変化
 - Jリーグ発足
 - 2002年FIFAワールドカップ招致活動〜開催
 - フットサルの誕生
- ◆インターネットの普及
 - 全国各地の「同志」がネットワーク化
 - 「ネットワーク」を「フットワーク」につなげるマインドと活動

「サロン2002」としてリスタート(1997年度)
2000年度より会員制導入(一口会員は3,000円。それ以上を定める)
2010年度より会費は3,000円/年(それ以上は寄付金扱い)
2013年度は全国に約180名の会員が
主な活動は、月例会、公開シンポジウム、(い・わ・ゆ・る)出張サロン等

い・わ・ゆ・る「出張サロン」- サロンin●●

(1996年度の伊豆今井浜、1997年度のJヴィレッジは「合宿」)

- 1998年度 ... 鹿島
- 1999年度 ... 新潟、掛川
- 2000年度 ... 新潟
- 2001年度 ... 清水、神戸
- 2002年度 ... 刈谷、(神戸=シンポジウム)
- 2003年度 ... 大分、(両国=お出かけ)
- 2004年度 ... 伊香保、成岩
- 2005年度 ... 名古屋
- 2006年度 ... フランクフルト
- 2007年度 ... 高知
- 2008年度 ... 岡山、金沢、那智勝浦 → 行き過ぎ!
(2009年度の川崎は「お出かけ」、2010年度の堺は「シンポジウム」、2011年度はなし)
- 2012年度 ... 大分白杵、(名古屋=シンポジウム)
(2013年度以降、一時見合わせ。豊田での「お出かけ」は臨時開催)
- 2017年度 ... (品川=お出かけ) (ほか調整中)

サロン2002の“これから” - 2013年4月例会資料(一部改訂)

- ◆事務局機能を強化したい!
「プロ意識を持ったボランティア」と、「ボランティア精神を持ったプロ」で運営してきたが、いまのままだと、現状が限界。いま以上を求めるなら、事務局機能の強化は不可欠!
(“中塚個人商店”の限界)
- ◆組織としての姿がみえるようにしたい!
- 他の組織と連携を図る際、法的にも対等の姿で対応したい。
「いい!、あなた方は何者ですか?」に答えられるように
- 補助金等の受け皿となれるようにしておきたい。
- ◆事業の担い手としての“サロン2002”となっていきたい!
- 月例会、公開シンポジウム、出張サロンなど、これまでやってきた事業は継続する
→ より規模を拡大して実施できる
- “ゆたかなぐらし”を志向する良い活動の担い手になりたい
例) DUOリーグの事務局をサロン2002が担う → 可能か?
例) リサイクルプロジェクト「スキッププロジェクト」を担う → 可能か?
例) 「オリンピック教育」「U-18フットサル」を他の組織と連携して進める → 可能か?
↓
法人化にいつ踏み切る? → いまでしょ! → 2014年5月NPO法人化

NPO法人化以降のサロン2002

- ◆従来のネットワークはそのまま継続
従来の「スポーツ文化ネットワーク サロン2002」は、NPO法人サロン2002が運営するネットワーク。引き続き「スポーツを通しての“ゆたかなぐらし”」を志しに担う同志のネットワークとして、全国に約100名のメンバーが、(うちNPO会員は約30名)。*法人化の際に離れていった人も...徐々に復帰
- ◆NPO法人としてさまざまな事業に取り組む
- 同志がつながるネットワークの拡充
- 月例会は6月で通算250回、公開シンポジウムも含め、サロン2002のコア事業として継続。
- toto助成金を受け、「U-18フットサルリーグチャンピオンズカップ」を主催。
- SFコンソーシアムの一員として、オリパラムーブメントに関わる。
「ケルベタン・幕内ユースフォーラム」など五輪教育の担い手となる。
- DUOリーグの事務局を受託。スキッププロジェクトにも取り組む
- その他
- ◆「これから」の可能性と課題
- スポーツを通しての“ゆたかなぐらし”を目指して
- “ゆたかなぐらし”を志向する良い活動の担い手になりたい
- 中塚理事長の“個人商店”からの脱却を! → bu事務局への負担増。担い手募集中!

170827 公開シンポ補足資料

本シンポジウムの進行と内容

第1部 「この20年」を語る－サロン2002のあゆみとともに（案）（14：00～15：45）

1) コーディネーター（中塚）より

本シンポジウムの背景、進め方を共有した後、サロン2002の20年をざっと振り返ります。

2) 演者① 仲澤 眞 Jリーグ観客調査から見えるもの－「みるスポーツ」の20年

社・心グループ時代から取り組む「Jリーグ観客調査」を通して、Jリーグの誕生が「みるスポーツ」をどう変えてきたのか、いま何が起きているのかを考察します。クラブ・リーグやスポンサーの取り組み、ファンの性格、そして「ライブスポーツとメディアスポーツの融合」について言及します。

3) 演者② 宇都宮 徹壺 ファインダーから見えるもの－地域スポーツの20年

日本が初めてワールドカップに出場した1998年の『サポーター新世紀』（勁草書房）。2002年FIFAワールドカップは各地にレガシーを残しました。それが2002年以降、どのように展開し、いまにつながっているのか。J2、J3、JFL、地域リーグ、都道府県リーグに属する選手やクラブの取材を通してみえるものを取り上げます。

4) 演者③ 鈴木 崇正 IT技術とスポーツの変遷－ネットメディアの20年

20年前、すでに商業利用が一般化していたインターネットは、IT技術の進化によって、ネットにとどまらない広範なIT技術やスポーツの各分野と関わりを持つようになりました。この20年の変化を概観することから、情報発信の多極化やコンテンツの多様化が進んでいったこと、そしていまAI・IoTによるデータの価値の飛躍的増大が2020年後のスポーツや社会に与えるインパクトについて、参加の皆さんとともに考えるきっかけをご提供できればと思います。

5) 演者④中塚 義実 指導現場から見えるもの－「するスポーツ」の20年

まずは1987年度から30年間続けている筑波大学附属高校における“定点観測”で感じた高校生の質の変化を「コミュニケーション」の観点から考察します。次にユースサッカーリーグの立ち上げから全国に広がるまでの事例を紹介します。思い切り“遊ぶ”ための取り組みが、公認化にともない指導者の“遊び心”が失われていく様子、それが「アートとの融合」につながっていったことなどを紹介します。

6) ディスカッション

指定発言者として本多克己氏（(株)シックス）から「U-18フットサルの20年」、佐藤一朗氏（靴創家）から「スキンプロジェクト」についてご紹介いただきます。最後に徳田仁氏（(株)セリエ）から「観戦ツアーの20年」について述べていただき、第2部につなげます。

第2部「これから」を語る－2020年を越えて（16：00～17：00）

指定発言者からコメントをいただき、会場全体で意見交換します。

1) 2019年ラグビーワールドカップに関係して

- ・嶋崎雅規氏（国際武道大学）…2019年ラグビーW杯の概要
- ・名方幸彦氏（NPO法人文京教育トラスト）…文京ラグビースクールの取り組み

2) 2020東京オリンピック・パラリンピック関連

- ・勝又正秀氏（スポーツ庁オリパラ課長）…2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けて
- ・川井寿裕氏（スポーツ庁競技スポーツ課長補佐）…競技力強化のための今後の支援方針について
- ・岸卓巨氏（SFT事務局）

演者プロフィール

◆仲澤眞（筑波大学体育系准教授）

スポーツの文化性やスポーツの公共性・公益性に配慮したスポーツマーケティング研究に取り組んでいる。日本サッカー協会、日本プロサッカーリーグ、日本ラグビーフットボール協会、日本体育協会等との共同研究を基盤に、研究のフィールドは、サムライブルー、なでしこ、ユニクロキッズサッカー、Jリーグ、ラグビー日本代表、日本スポーツマスターズなど、多岐にわたる。

編著書に『現代スポーツのパースペクティブ』（大修館書店）、『スポーツプロモーション論』（明和出版）、『スポーツイベントの展開と地域社会形成』（不味堂出版）など。この秋に編著『よくわかるスポーツマーケティング』（ミネルヴァ書房）が刊行される。

◆宇都宮徹壺（写真家・ノンフィクションライター）

東京藝術大学大学院美術研究科修了後、TV制作会社勤務を経て、97年にベオグラードで「写真家宣言」。以後、国内外で「文化としてのフットボール」をカメラで切り取る活動を展開中。

著書に『ダイナモ・フットボール』（みすず書房）、『股旅フットボール』（東邦出版）など。『フットボールの犬 欧羅巴 1999-2009』（同）で第20回ミズノスポーツライター賞最優秀賞、『サッカーおくのほそ道』（カンゼン）で2016サッカー本大賞を受賞。近著『J2&J3 漫遊記』（東邦出版）。2016年より宇都宮徹壺ウェブマガジン（WM）を配信中。<http://www.targma.jp/tetsumaga/>

◆鈴木崇正（NEC マネジメントパートナー(株)シニアエキスパート）

1990年代中頃よりサッカー書籍を編集する一方、草創期のインターネットメディアでコンテンツを制作。1997～2006年、サッカー専門インターネットマガジン「Soccer Click」編集長。日本代表、ワールドカップ予選、欧州サッカーなどを題材に、書籍とWEBを横断するコンテンツを企画・制作。

現在、NECの提案活動やブランディングに従事する傍ら、社会人スポーツ取材や、音楽誌への執筆など活動中。

◆中塚義実（NPO 法人サロン 2002 理事長／筑波大学附属高校教諭）

1987年の着任以来、同じ学校で保健体育科教諭・蹴球部顧問として高校生の指導に当たる。いまは高校2年生（127回生）の担任（学年主任）。前身の「社・心グループ」時代からNPO法人化した現在に至るまで、サロン2002とともに歩みながら「スポーツを通しての“ゆたかなくらしづくり”」に取り組む。

筑波大学蹴球部同窓会茗友サッカークラブ理事長、全国高体連研究部活性化委員長、東京都サッカー協会フットサル委員会ユース（2種・3種）部会長など。著書に『少年のためのサッカー入門』（長岡書店）、『日本のスポーツ界は暴力を克服できるか』（かもがわ書店）、『運動部活動の理論と実際』（大修館書店）など。

シンポジウム参加者一覧

青山 啓二	安藤 裕一	安藤 悠太	石原 壮介	伊藤 薫
上田 裕子	宇都宮 徹壱	宇都宮 晴子	大河原 誠二	大串 哲朗
大坪 由里子	小栗 純二	小澤 圭史	春日 大樹	春日 良一
片上 千恵	勝又 正秀	金子 正彦	川井 寿裕	川島 大悟
川名 紀義	岸 清馨	岸 卓巨	北原 由	木村 康子
木村 亮太	国島 栄一	黒崎 祐一	小池 靖	香西 武彦
糀 正勝	小堀 俊一	小松 章一	佐々木 瞭	笹田 健史
笹原 勉	佐藤 一朗	嶋崎 雅規	白井 巧	鈴木 崇正
鈴木 稔	高島 正暉	田中 俊也	張 寿山	寺田 次郎
遠山 諒	徳田 仁	内藤 裕志	長岡 茂	仲澤 眞
名方 幸彦	中塚 義実	中西 優子	中村 秀行	中村 年秀
中山 さとこ	平井 喜郎	平峯 佑志	細貝 貞夫	本多 克己
政岡 恭	松下 徹	皆川 宥子	村林 裕	室田 真人
茂木 龍五郎	守屋 佐栄	守屋 俊秀	矢野 裕之	山内 直
湯浅 浩志	吉原 尊男	脇坂 大陽	和田 弘	渡邊 周平

(敬称略)



参加者アンケート

会場で参加者にご回答いただいたアンケートの感想・自由意見の中から、シンポジウムの内容に関するものをご紹介します。

- 「20年でくらしはゆたかになりましたか」という問いかけを明日の糧として、いろんな「仕掛け」につなげていきたいものです。
- 各情報は短かったが内容としては有意義だった。
- 途中参加でしたが有意義な時間となりました。ありがとうございました。
- 自分の関心分野であるJと地域振興、クラブ、サポーター文化、ファンコミュニティなどのリアルなお話をきくことができ、大変勉強になりました。
- 知らない頃の興味深いお話など盛り沢山で濃い時間となりました。大変充実していましたが、20年の間に変化した"アスリート目線"での話があっても面白かったかと思えます。ありがとうございました。
- プロや広告産業に気は使うべきだが、アマチュアも技術や戦術を追える環境が欲しい。
- 継続は力なり。サロン2002の20年を振り返り、今日まで継続してこられた皆様の努力には頭が下がる思いです。過去の中から今日の立ち位置を理解し、明日の展望を語るこのような場が、今後も増々発展されていくことを祈っております。中塚

先生には今後とも皆さんを引っ張って行って下さい。スタッフの皆様ありがとうございました。

- 今後のご発展を祈念申し上げます。ラグビーも頑張ります！
- 障害者サッカーの現場をみてまわっています。今後のテーマについてとり上げていただければと思います。ありがとうございました。
- 岸さん、お声かけいただき、とても嬉しく、有意義な時間をありがとうございました。
- 今回は、時間の関係で後半部分が参加できませんでしたが、とても興味深い内容でした。次回もお声かけ頂けるのであれば、是非参加したいです。
- お1人ずつの時間が短くもったいない気がしますが、一方でこれだけ様々な内容の話題を聞くことが出来て面白かったです。20周年おめでとうございます。今後ともご盛会をお祈りします。
- ご無沙汰しております。ご案内をいただきありがとうございます。理念をかかげて20年、素晴らしいです。
- 2020以降の取り組み、何を考えるべきかについて、オリパラに関することも全体的にもう少し聞きたかった。
- オリパラのレガシーも日本社会の「スポーツ文化」の欠如をどうするかが大切な気がしました。貴重な話が伺えて楽しい時間でした。

シンポジウムにご支援いただいた方々

スポーツ振興くじ toto

賛助団体

株式会社 EN(フットサルショップ RODA)
株式会社 GMMS ヒューマンラボ
株式会社 シックス

テーブル起こし 佐々木 瞭 他

シンポジウム報告編集・校正

安藤 裕一 川名 紀義 木村 康子 笹原 勉
中塚 義実

観戦ツアーの20年

徳田 仁 (株式会社セリエ(観光庁長官登録旅行業第1849号)代表取締役)



プロローグ

このたび、「観戦ツアーの20年」(観戦の物語)というテーマで寄稿させていただくことになりました。スポネットサロン会員の徳田です。

しかし、物語のスタートは20年では少し足りずさらに4年ほど遡ります。

24年前…1993年…この年はサッカー界にとって私個人にとっても激動の年でありました。

5月15日:日本プロサッカーリーグ「Jリーグ」が開幕

7月28日:私の前職の会社(スキーツアーの大手だった)が倒産

10月28日:ドーハの悲劇(ワールドカップUSA 1994 アジア最終予選 日本2-2 イラク)

11月22日:株式会社セリエを設立

今思えば、まさに日本のサッカー界がアマチュアからプロに、ワールドカップが夢から現実に近づいてきたそのタイミングで会社を立ち上げたのでした。

観戦ツアーの始まり…ドーハの悲劇とその後

日本代表を観戦しない「観戦ツアー」としては、日通旅行(日本通運の旅行部門)が1982年ワールドカップ・スペイン大会から、1992年ヨーロッパ選手権スウェーデン大会からツアーを企画しています。私の見解では観戦ツアーの老舗No1は日通旅行だと考えています。JTBなども取り扱っていたと思われるが、この時代の詳細は不明です。

では、日本代表を観戦するツアーの始まりはいつなのか?とありますが、その前に日本代表のサポーターと呼ばれる人たちはいつから応援活動を始めたのでしょうか?

私がかつ知っている限り、1962年12月の第1回三国対抗戦をきっかけに設立された「日本サッカー狂会」

(俗称:くるうかい)の面々ではないでしょうか?

このような方々から始まり、Jリーグができるまでの長い間陽の目を見ることはなく地道に活動してきた日本代表のサポーターが、初めてワールドカップの背中を見たのが1994年アメリカ大会・アジア最終予選だったと思います。

1993年10月はまだ私が会社を立ち上げる前から、後に「ドーハの悲劇」と呼ばれる「日本対イラク戦」が行われたワールドカップ・アメリカ大会・アジア最終予選の観戦ツアーは実施しておりません。

当時の「観戦ツアー」…この言葉が存在していたかどうかはわかりませんが…現地で観戦された方に話をきいたところ現場となったドーハのアルアリ・スタジアムで観戦していた日本人の数は約300名。そのうち現地の日本人会が中心となって集まったドーハ在住の日本人、およびカタール近隣の中東諸国から応援に来た方たち(A氏の証言:当時サウジアラビアにODAの仕事で出張していた…による)が約80名、日本からは日通旅行のツアーで約200名(B氏の証言:当時のツアー担当者)、JTBのツアーで約20名(C氏の証言:当該ツアー参加者)、その他は選手やJFAの関係者で、応援グループとしては15名ほどの若者たち(太鼓は持ち込んでいないがなにかをたたいて応援していた)がいたそうです。

この試合の翌日、日本中がお通夜のようになったことを今でも思い出します。そしてこの3年後、1996年3月24日、U-22日本代表が一足先に28年ぶりの五輪出場を決めアトランタ五輪に出場しました。この頃からは大手旅行会社を中心に多くの観戦ツアーが造成されていったと思います。

フランスワールドカップ…観戦ツアーの定着

フランスワールドカップのチケット騒動を覚えているでしょうか?すでに20年前の出来事となり30代以下の方は知らない方も多いのではないでしょう

か？

1997年11月16日、日本代表がジョホールバルでイランに勝利しフランスワールドカップ・アジアの第3代表を勝ち取ったその勢いで、翌1998年フランスワールドカップには多くの日本人が現地に観戦に訪れようとしていました。そのため旅行会社はワールドカップ特需となり多くの会社が観戦ツアーを企画したのです。しかしISL社(当時FIFA公式代理店で後に倒産)が絡んだとされる空売りが横行し、特に初戦の日本対アルゼンチン戦のチケットが手に入らず複数の旅行会社社会社がツアーを中止したのでマスコミを巻き込んだ大混乱が起きました。(この時の日本対アルゼンチン戦のチケットのダフ屋価格は1枚36万円でした)

弊社も例外ではなく、オーダーしていたチケットが届かず、現地で他社から買い直すことになり、二重払いでかなりの損害を受けましたが、20数名の規模だったためなんとかツアーは催行しました。しかしこの時、大手旅行会社は1,000人規模で集客していたので、高騰したチケットを買って催行した場合の損害を考えると中止せざるを得なかったのだと思います。

この事件きっかけで老舗旅行会社●●旅行などでは責任者が左遷されるなど、特に大手の旅行会社では「サッカー観戦ツアー」はリスクが高い商品として認識され、無理して手を出す価値はないとして力を入れなくなる傾向が発生しました。

そんな中、ワールドカップでの活躍を評価された「ヒデ」こと中田英寿(当時ベルマーレ平塚所属)がセリエA・ペルージャに移籍。1998-1999シーズン開幕戦でユベントスから2ゴールを奪う鮮烈なデビューを果たし「セリエA観戦ツアー」に火が付きまして。ここから2000-2001シーズンにローマで優勝するまで、セリエAの観戦ツアーは弊社だけでも年間300名以上の参加者を集める商品に成長したのです。おそらく日本代表の試合やワールドカップなどの大会以外のレギュラーシーズンを通じた「観戦ツアー」が定着したのはここからだと考えます。また、ヒデの活躍は大きく影響したと思いますし、当時WOWOW(1999-2000シーズンからはスカパー)でヨーロッパのサッカーリーグとしては唯一セリエAが全試合中継されていたことも大きかったでしょう。

ただし、ブレイクしたのがフランスワールドカップのチケット騒動の後だったため、トラウマから観戦ツアーのユーザーはチケットに関して旅行会社を簡単には信用しなくなりました。「チケットは本当に大丈夫

なのか？」などお客様からの問合せは多く販売には苦労しました。「もし弊社のミスで観戦チケットが手に入らなかった場合は旅行代金全額を返金します」という但し書きは今でも弊社のホームページに記載しております。

インターネットの普及…告知・募集方法の変化

さて、この20年間で観戦ツアーに限らずツアーを募集する媒体やその方法はインターネットの普及により大きく変化しました。1997年11月8日(土)、フランスワールドカップ・アジア最終予選・B組最終戦(国立霞ヶ丘競技場)で日本がカザフスタンに勝利しB組2位が確定。アジア第3代表決定戦に進むことになりました。この試合は土曜日だったのですが、週明け月曜日から弊社の電話は鳴りっぱなし。朝出社するとすでに4回線ある電話はすべて赤ランプが点滅していて夜8時を過ぎるまでその状態が続きました。第3代表決定戦は11月16日でしたから中6日しかありません。電話で問合せを受けてFAX・郵送による申込受付と書類の発送…当時のアルバイトまで総動員で対応しましたがとても追いつきません。それでも何とかこなすことができた約80名様のお客様をシンガポール経由でマレーシア・ジョホールバルに運びました。今ならばホームページに必要な情報を掲載すれば電話が鳴り続けることもなく、申込も書類ではなくインターネット上の申込フォームから受付けることができるのもっとたくさんの申込を受けられたかも知れません。

一方、告知方法にも変化がありました。20年前は観戦ツアーの告知は雑誌に広告が主流で、弊社でも週刊サッカーダイジェスト、週刊サッカーマガジン、ワールドサッカーダイジェストなどの専門誌に定期的に広告を出稿していました。また、この当時は広告を見た方がそのまま問合せ・申込をしてくるため雑誌の限られたスペースに多くの情報を記載する必要がありましたが、インターネットの普及とともに雑誌を見てそのまま申込してくる方は少なくなり、雑誌を見た方が、一旦ホームページを見に行き行って詳細な情報を確認してから申込してくるようになったので、今では雑誌にはメニュー的な広告を掲載しインターネットに誘導するように作られています。そしてほとんどが検索エンジンなどを通じて直接ホームページにアクセスしてくるようになりました。

他の面からみても観戦ツアーという分野の旅行を取り扱うにはインターネットは無くしてはならないもとなりました。例えばセリエA観戦ツアーのチケットの手配には本人のパスポート情報（顔写真のページのカラー画像）が必要なのですが、インターネットが無ければお客様とのデータのやり取りができません。もしインターネットが利用できないお客様の予約を受付けるとすれば、パスポートのカラーコピーを郵送してもらい、こちらでスキャンして現地にデータを送るようになるため時間がかかり、間近の出発日の予約は受けられないということになります。

この20年で観戦チケットそのものも変化しました。ヨーロッパではシーズンチケットを中心に紙のチケットからカード式のチケットに移行するクラブが増え、プレミアリーグやリーグ・エスパニョーラでは高いグレードの席の大部分がカード式に切り替わっています。ただしカード式の場合は観戦後にチケットを回収するため、観戦したお客様が記念にチケットを持ち帰ることができなくなりました。少し残念ではありません。

また、Eチケット（データをA4サイズの紙にプリントして入場の際に提示する）も増えており、ヨーロッパのワールドカップ予選やフレンドリーマッチなどではほとんどがEチケット対応になっています。先日行われた日本代表のブラジル戦（リアル）、ベルギー戦（ブルージュ）も原則Eチケットでしたし、クラブワールドカップも同様でした。日本で見かけないのは「ぴあ」や「ローソン」など日本独自のチケット流通システムが先行して確立されているからでしょうか？そのうち、ガラケーならぬガラチケと呼ばれる日が来るかもしれません。

サッカー観戦ツアーの氷河期…ドイツから南アまで

1993年から2002年日韓ワールドカップを経て2006年ドイツワールドカップまでは観戦ツアーの発展期であり、特に日韓ワールドカップでは多くの新しいサッカーファンが誕生しました。

ヒデという絶対的なスターの存在も大きく、フランスワールドカップ予選からの日本代表戦は親善試合を含めて完売するのが当たり前という時代が続きました。

ところが、ドイツワールドカップでジーコジャパンが1分2敗で惨敗し、同時にヒデが引退。日本代表人気は徐々に低下し、それまでは完売していたチケッ

トも売れ残るようになりました。2007年には期待されていたイビチャ・オシム監督が健康を害して退任し岡田武史監督に交代。チケットが完売しない状況は続き2008年1月30日の日本対ボスニア・ヘルツェゴビナ戦（国立）では観客動員数は最低の26,971名を記録。テレビ視聴率も低迷し番組制作に必要な広告収入不足も懸念されるようになりました。加えてリーマンショックによりサッカー界は経済的に大きな影響を受けました。2009年11月18日、アジアカップ2011予選「香港対日本」（香港スタジアム）のピッチに弊社の看板が登場したのはそんな状況があったからなのです。「セリエフットボールネット」の隣りが「ダンディハウス」…こんなことはもう二度と起こらないでしょう。

苦しい時期は続きましたが、しかし、2010年南アフリカワールドカップが開幕すると状況は一変します。初戦のカメルーンに勝利しオランダには負けたもののデンマークに勝利して2勝1敗でラウンド16に進み、日本代表はすっかり人気を取り戻しました。その後の日本代表は人気をキープし現在に至りますが、2006年から4年間はまさにサッカー界の氷河期であり観戦ツアーの氷河期でもあったのです。

AFCチャンピオンズリーグからクラブワールドカップ

この原稿の締切り=11月中旬が近づいてきたころ、浦和レッズが10年ぶりにAFCチャンピオンズリーグ決勝に進むことになり、アウェー（第1戦：対アルヒラル）のサウジアラビアのツアーを再び企画することになり、わかに忙しくなりました。再びというのは9月5日のロシアワールドカップ・アジア最終予選・最終戦でサウジアラビアへのツアーを苦労して催行したばかりだったからです。招聘状やビザ（査



証) 取得の準備など、他の国であれば何も問題なく手配できるのに「なぜまたサウジなんだ!」と愚痴をこぼしつつ時間が過ぎていったのですが、結果はなんと優勝。FIFAクラブワールドカップ UAE2017 に出場することになったのです!

優勝が決まったのが11月25日(土)、そしてクラブワールドカップの浦和レッズの初戦は12月9日(土)。またまた、新たなツアーの企画が必要になりました。ただし、12月9日の試合を観戦するには12月8日に日本を出発するのですが、書類等の発送のため、その1週間前には締切らねばならないので募集期間は11月27日(月)から30日(木)までの4日間のみ。急ピッチで準備して募集を行ったのです。

そして、4日間の申込人数はなんと約70名。社内はドタバタでしたが改めてサッカーファンのパワーと浦和のすごさに驚かされました。ツアーの参加者数が予想以上に増えたため、現地まかせにはできず私も急遽出動することになり、原稿をまとめられないままアブダビに飛んだのでした。

レアル・マドリードとの準決勝に進めばさらに申込が増えると期待していたところ、浦和は開催国王者：アルジャジーラとの1回戦でまさかの敗戦。5位決定戦にまわることになり、準決勝・決勝/3 決を観戦する予定だったお客さんのうち10名ほどがキャンセルになるというオチがついたのですが、こんなことは他のスポーツではありえないことと思います。サッカー観戦ツアー恐るべしという実例でした。

前段でツアーの募集方法の変化について触れましたが、旅行の目的となる大会への出場が決まってから、たった2日で募集開始できるのはインターネットの普及による恩恵に他なりません。

余談ですが、現在の AFC チャンピオンズリーグは東アジアのクラブは決勝まで中東や中央アジアのクラブと対戦することはなく、グループステージから準決勝までほとんど日中韓+豪のクラブ同士の対戦となるため少々マンネリ化している感があります。日程や移動距離の問題は残りますが以前のレギュレーションのようにベスト8からはアジアのどこのクラブとでも対戦するようにしたほうが楽しいと思うのは私だけでしょうか?

観戦ツアーの今後


現在の海外観戦ツアーの目的は、ヨーロッパ・サッカー(ヨーロッパのリーグ…プレミアリーグ、

リーグ、セリエ A、チャンピオンズリーグ等・・・)やそこで活躍する日本人選手を観戦するもの)、日本代表(ワールドカップ予選やフレンドリーマッチの観戦)、Jクラブ(AFCチャンピオンズリーグやクラブワールドカップの観戦)をはじめ、ワールドカップやEURO、アジアカップや五輪などのビッグイベント(各年代のワールドカップ、アジア選手権、フットサル等)を観戦するものなど多岐にわたっています。

また、以前は「弾丸ツアー」と呼ばれる滞在時間の短いツアーが若者を中心に人気がありましたが、試合の他にもせっかく訪れたその国やその都市での観光や食事も楽しみたいという「スポーツツーリズム」への広がりも見せています。今後はこの方向からのアプローチも面白いと考えています。

一方、観戦ツアーの費用は東アジアや東南アジアを除けば10万円を超えるため、ヨーロッパや中東へのツアーに参加できるのは年齢的にも30代以上が中心になっていること、中でも30代後半から40代の独身女性は自分のために使えるお金を十分持っており、さらに休暇も取りやすいため近年シェアが増えていきます。また同じ理由でリタイアしたご夫婦が年に何度も参加される件数も増えています。今やJリーグや国内の日本代表戦の観戦は日常であり、アウェー(海外)での経験は観戦ライフにおける必要かつ重要なアクセントになっていると思われます。

今後の観戦ツアーの課題は20代・30代の若い層を金銭的な面でも逃すことなく取り込んでいくこと。興味深い試合や大会が増えてくれることはもちろん、日常である国内の観戦からアウェーに出る行くことの楽しさを知らせてあげること、その手伝いをいかにできるかということだと考えています。

来年6月に迫ったワールドカップ・ロシア大会では、大会期間中のビザが原則不要になりロシアへの渡航手続きが楽になった反面、日本代表のグループステージ3試合がすべて地方都市での開催となり、国内線での移動やホテルの確保という難しいハードルを超えなければなりません。25年間のノウハウや人脈を生かしてツアーを成功させたいと考えています。ちなみに弊社ホームページでは現在ワールドカップ観戦ツアーの仮登録(アンケート)を行っておりますので興味のある方は是非ご協力願います。 

サッカーをめぐる冒険 (新たなビジネスモデルを求めて)

湯浅 浩志 (日伊協会)



過ぎ去った過去のことを人はどう振り返るのだろうか？

ある人は成功、栄光、業績、名声、或る人にとっては、失敗、挫折、汚点、懺悔。

これから記すことは、今から四半世紀程前、アマからプロへと歴史の大きな舵を切った日本サッカー界疾風怒濤の時代に、IT業界に身を置いていた僕達がどんなことを考え、どんなことにトライしたか？という赤裸々な告白。パソコンの急速な普及を始め、衛星放送による多チャンネル化、そしてネットワーク配信の世界へと、僕達の業界もまたテクノロジーとマーケティングの大変革時代に突入していた。これらの出来事はすべてもう過ぎてしまったこととして、僕の人生メモリーからは消去されていたはずだったが、先日のサロン2002に出席し、今回原稿依頼を受けたことで、サッカーに関するディレクトリをもう一度開けてみようという気になった。過ぎてしまった過去は変えられないし、変えようがない。そして後世の人がどのように評価するかも自由だ。何故ならあの時のあの出来事は、紛れもない僕達の生き様だったから。

パート1: キーワード【広告宣伝活動】、【芝生のグラウンド】

当時、僕は某エレクトロニクスメーカーの広告宣伝プロモーション担当の一課長。年間数十億円もの宣伝予算の企画立案、決済と執行を任されていた。会社は東証一部上場の指定銘柄になり、リクルート人気企業ランキングでは5年連続理工系一位、文化系でもベスト10入りし、エクセレントカンパニーと持て囃された。しかもまだバブルがはじける直前の頃でもあり、一課長とはいえ、今思えば相当の自由度と権限を与えられていた。

そんな頃、一緒に仕事をしていた鈴木崇正氏とは、サッカー及びスポーツ文化について熱い議論を交

わしていた。僕より若いのだが、サッカーに関する造詣の深さと洞察力と情熱にはいつも感心するばかり。僕もまた約50年前のメキシコ五輪銅メダルを知る「サッカー小僧」であり、地域の少年サッカー団の代表を務め、地元のグラウンドの芝生化に取り組んでいた。時はまさにJリーグが緑鮮やかな芝生の絨毯の上で開幕を迎えようとしており、緑の芝生の上で子供たちにボールを蹴らせたいという僕の情熱というかファナティックな思いは他の親を巻き込み、周囲に伝播し、様々な分野の専門家の協力を得、緑の舞台が作られようとしていた。

彼との議論で、自分達の仕事とサッカーとの結びつきを作ることにはできないだろうか？と考えるようになったのは、当然の帰結だったのかもしれない。

パート2: キーワード【インターネット黎明期】、【社内起業家】

当時、インターネットは様々な可能性を秘めた画期的な技術だったが、一握りの人間にしか使われていなかった。世界中の人達がインターネットを活用してどのようなビジネスが出来るかを考えていた。社内でもたまたま新事業の種を探すべく、社内起業家募集があり、僕達が考えたサッカー情報の配信事業提案が、二百近い募集案の中から採用され、ニューメディア事業推進本部へ異動。コンテンツプロモーション部長として、全国の企業や自治体に、インターネットの可能性と新しいビジネスへの応用を啓蒙するプレゼンや講演会講師を勤めるなどして忙しく働いていた。

Jリーグのクラブや選手会、大手広告代理店、ゲームメーカーにも、ネットを使った有料情報発信サービスやチケットシステム提案を行ったが、その意味、社会的意義、そして可能性を理解し、興味を示してくれたのは、先日、急逝した元電通マン広瀬一郎氏やほんのひとにぎりの人達だけだった。Jリーグバ

ブルに浮かれていた関係者には、一人ひとりがスマホを持ち歩き、サッカー情報をやり取りする時代の到来など、全くあり得ない空想話が少数のパソコンオタクの戯言にしか映らなかったのだろう。

今振り返りみればそれも無理らしからぬことだったかもしれない。サッカーという「コンテンツ」はあったが、当時の「ネットワーク基盤」は貧弱な状況であり、従量制接続料金のパソコン通信のチャットが主流で、自動でメールや掲示板のメッセージを一気に受信して、切断してから読むのが普通であった。常時接続によるネットサーフィンを楽しむことが出来るようになるのはもっと後のこと。企業でもHPを持っているところは少なく、ノウハウや作成技術、サーバー環境も自前では持ち合わせていなかった。「端末」も今のようにスマホではなく、パソコンかゲーム機に限定されていた。そんな状況の中、当時の僕達のビジネスモデルは、ネット接続料金収入、ネット環境の整備とHP作成請負と広告収入やスポンサー収入といったものだった。「コンテンツ×ネットワーク基盤×端末」という成功方程式には程遠く、残念ながらまだ機は熟していなかった。つまり僕達は完全に先走っていたのである。

サロン2002の前身である社心グループでの勉強会に参加し始めたのはその頃のこと、僕達が考えることを検証し、新たな事業の可能性を考える絶好の場のひとつであった。毎回、サッカー関係者の発表を聴講し、その後の飲み会で談論風発の如く、熱い議論をするのが楽しみのひとつだった。

僕達は自ら範となるべく積極的なプロモーション施策を打った。アンブロカップ(ユーロのプレ大会的位置づけとしてイングランドで行われた大会で、現在のコンフェデレーションカップのように、大陸間王者と開催国で争われた)取材し、アジアサッカー連盟のプレス許可を得、マレーシアでのアトランタ五輪最終予選、オーストラリアでの10人制ラグビーの大会、仏ワールドカップ最終予選対韓国戦にソウルにネット募集のツアーを企画した。そうした活動の中で、将来を囑望されていた田嶋幸三氏(現日本サッカー協会会長)、大住良之氏や今は亡きジャンルカ・トト・富樫氏を始めとするメディアの評論家や写真家の方々、木村和司氏、金田喜稔氏の元Jリーガー等、徐々にサッカー関係者との人脈づくりが形成されていった。あらためてご理解とご協力をいただいた皆様に感謝の意を表したい。ネットを使ってサポーターの声を集めた「もうひとつのワールドカップ」という書籍を発行したのも思い出のひとつだ。

パート3: キーワード【BtoB or BtoC】【サッカーメディアのEsquireと草の根メディア】

当時の僕の仕事ぶりは異常だった。コンテンツプロモーション部だけでなく、PC-VAN事業推進本部の営業部長として、二つの部に各々の机と部下と仕事を抱えていた。毎日、夜になると別の職場で打ち合わせをし、一日二毛作と呼ばれる仕事振りだった。BtoBの仕事とBtoCの違った仕事の十字架を背負うことが、徐々に僕にとって負担になっていく。

BtoC活動としては、「Soccer Click」というWebサイトを立ち上げた。サッカー界の「Esquire」を目指し、ちょっとスノップでちょっと意欲的なWebサイト。パソコン通信の2チャンネルとは対極的な位置付けとして、大住氏を始めとする第一線で活躍されているプロの方々に執筆を依頼した。これまでのTV新聞雑誌を中心としたマスコミとは違った視点と表現力で勝負しようという志を持っていた。現在広く行われるようになった、試合後の記者会見全文掲載や野球リアルタイム速報技術などは、当時の仲間が開発したものだ。サロン2002からは中塚先生に連載記事を依頼。新しいサッカーメディアを提供することで、宇都宮徹壺氏や慎武宏氏といった新進気鋭の若手の発表の場として、多少なりともささやかな貢献が出来たのでは?と思っている。

その一方で、文字通り「草の根メディア」として自らの体験をもとに、「芝のグラウンドをつくろう!」というブログを掲載し、情報発信と共有活動を行った。まだブログという言葉さえ一般的でなかった時代に、何とか多くの方にこの実情を聞いてもらいたいという欲求を持つようになっていった。サッカーマガジンからの取材やインターネット雑誌等に、何度か紹介記事が掲載され、それがきっかけに講演会でのプレゼンターを務めた。

BtoBでは、POSレジのディスプレイ端末に、衛星、通信回線を利用して情報提供するシステム「情報流通卸」のコンセプトは大手コンビニに採用され、デジタルサイネージの先駆的事例となる。しかし、この物件受注が僕を股裂き状態に追い込むことになる。

パート4: キーワード【前代未聞の内示取消】【環境対応】

ほどなくして、組織改正があり、BtoCを対象と

する Biglobe への人事発令が行われた。サッカーを仕事にするには願ってもない突然の発令ではあったが、前記の BtoB 物件のシステムインの為には、僕の部隊が必要であり、「責任を持ってこの物件を全うしたい」と会社役員に内示取消の直訴をしたところ、新たにニューメディア技術開発本部という部署が作られ、部下と共に異動することになった。しかしこれがボタンの掛け違いの始まりとなる出来事だった。

それからのことはあまりに色々なことがあり、とても書き尽くせない。上司との確執、新会社の設立による部下の流出、組織の改編。。。サッカーに関する仕事をするのは出来なくなってしまった。僕はといえば、元の上司からの強い要請により、環境管理部という本社スタッフで環境ビジネスの仕事の立ち上げをすることになる。直接サッカーに関連した仕事は出来なくなってしまったが、日本中に緑の芝生を広めたいという芝生への情熱は変わらなかった。関係会社に自ら出向を名乗り出て、今まで培ってきた経験と知識を活かし、幼稚園、保育園、小学校に芝生提案を行い、幾つもの事例を作ることが出来た。「校庭緑化」の機運も高まり、ソフトサイエンス社より共同執筆で本を上梓することも出来た。その後本社の宣伝部門に復帰し、そこで数年間展示会関係の仕事をした後、56歳で2年間の有給休暇（セカンドキャリア休暇）を取得、イタリアの語学学校、大学に短期留学し、ワインの資格を取り、58歳で早期退職、現在第二の人生を謳歌している。


パート5 キーワード 【ビジネスモデル】

【継続は力】

かつて「現場主義」を始めとする日本的経営手法は「ジャパン アズ ナンバーワン」と称賛された。その後「低価格」を武器とする中国、韓国企業に日本企業、特にエレクトロニクスメーカー各社は「選択と集中」のもと、事業見直し、構造改革を迫られた。要は人減らしのリストラである。一方、死に体だったアップルが iPod で復活し、iPad、iPhone と立て続けにヒットを飛ばし、今や時価総額世界一企業へと躍進を遂げ、Google、Amazon、Facebook の IT 新興企業もベスト 10 入りしている。新しい企業が人々の生活スタイルを変えてしまうようなサービスを生み出し、社会インフラの一部となっている。どうも日本は「改善」による積み重ねにより、「1 を 10 にすること」は得意だが、「0 から 1 を生み出す」ことが苦手なよう

だ。Walkman が iPod になれなかったのは、優秀な HW だけでなく、魅力的なコンテンツを束にして配信する仕組みを思いつかなかったからだ。僕達はそれが分かっていたが実際には出来なかった。何しろ僕達が目指していたのは、iPhone を使って、サッカー情報を Google し、チケットを Amazon で買う Facebook であったのだ。

ネットの出現により旧メディアの退潮ぶりは明らかである。ファッションや百貨店を始めとする小売業界は ZOZOTOWN、メルカリ、amazon、楽天に取って代われようとしている。タクシー業界は Uber、ホテル業界は AirB&B の脅威にさらされている。既に旅行はもう TripAdviser、Booking.com や blogger 記事 抜きには考えられなくなった。スポーツ業界、特に Jリーグは DAZN の登場で、各クラブは財政的に豊かになり、ユーザは J3 までの全試合を独占ライブ中継。見逃し配信で全ての試合を観ることが出来るようになった。

四半世紀前、僕達が構想していたことはほとんどすべて実現されようとしている。僕達がしてきたことはかなりアバンギャルドな試みであり、結果としては単なる「くたびれ儲け」だったのかもしれない。しかしすべてのものは最初からそのように存在しているのではなく、いくつもの先駆例や実験作や革新者がいて、幾度もの成功と失敗を重ね、磨かれ、作り上げられていくものだ。Soccer Click を始めとした一連の活動は、すべて消滅し、何の形も残っていないが、僕の心の中に邯鄲の夢として残されていた。僕の作った地元の芝生のグラウンドは、歴代のお父さん方に引き継がれ、今年も緑のグラウンドが維持されている。そして何よりも嬉しいことは、中塚先生を中心としてサロン 2002 の活動が今もなお、継続して開かれているということだ。先生のご苦勞を思うと感謝の念で一杯になる。是非ともこれからも継続して発展して欲しいと強く願うばかりである。 

「サロン2002」との出会い、そして2020年以降を見通した強力で持続可能な競技力強化のための支援体制の構築について

川井 寿裕 (スポーツ庁競技スポーツ課課長補佐)



「サロン 2002」 20 周年記念シンポジウム

今年で「サロン 2002」が20年を迎えるということで中塚先生からご案内をいただき、今年の8月の終わりに20周年記念シンポジウムが筑波大学附属高校の桐陰会館で開催され、出席しました。「サロンと出会ったのはいつ頃のことだったか……、随分と長い時間が流れたなあ」そんなことを考えながら、御護国寺駅で降りて、サロンの定例会後いつもお酒を飲んで熱い議論を続けた中華料理店の前を通り過ぎ(当時のお店の名前は「カリンカ」だったかな?名前は変わっていましたね)、筑波大学附属高校へ向かう坂道をゆっくりと上り、何とも言えない懐かしい気持ちと、筑波大学附属高校周辺の雰囲気を出しながらかつて20周年記念シンポジウムに向かいました。中塚先生はじめ、当時サロンでお世話になった方々と久しぶりにお会いでき、自分を含めて頭髪の状態で過ぎた時間の長さを感じましたが、本当に楽しいひと時を過ごすことができました。皆様、ありがとうございました。

「サロン 2002」 との出会い

私がサロン 2002 と出会ったきっかけは、スポーツ振興くじ (toto) でした。当時、私は文部省で toto の立ち上げに関する仕事をしていました。toto は、1998 年 5 月に「スポーツ振興投票の実施等に関する法律」が衆議院本会議で可決成立し、その後 7 月に、「スポーツ振興投票準備室」が文部省 (2001 年 1 月の省庁再編により文部科学省) に設置され、私はその準備室に配置 (私も含めて 5 名) されました。当時私は係員 (20 歳代後半) でしたが、省内の精鋭が集結 (?) され、上司にも恵まれたと今でもそう思っていま

す。当時は、教育を担う文部省が toto を所管することに対して批判する声が少なからずあったと記憶していますが、準備室に配置された我々には、新たに実施されることになった toto 制度の構築に向けてやらなければならないことが山積していて、toto 制度の創設の目的を心に秘めて、とにかく成功させなければならないという強い思いと、新たな制度構築と業務にチャレンジできる喜びで満ちていたと思います。一方で、金融情勢の極端な悪化等を背景に、金融機関の toto 事業への参入意欲の急速な衰えなど、非常に厳しい状況であったと記憶しています。そのような状況の中での業務の一つが toto 制度の広報であったのですが、文部省の役人が toto の営業マンとなって、金融機関をはじめ様々な場面で toto 制度の説明に走り回り、その中で出会ったのがサロン 2002 でした。

toto はサッカーの勝敗等を予想するくじですので、まずはサッカー好きの人たちに応援をしてもらう必要があると考え、当時インターネットでサッカー好きが集まる機会があることを知り、その機会に飛び込みで営業活動を行い、その場を通じて知り合ったのが中塚先生でした。今思えば、かなり無茶苦茶な営業であったと思いますが、その機会を作ってくれた当時の上司のやる気や発想、チャレンジ精神には今でも頭が下がります。今では私とその当時の上司の年代になり、今の私にそのレベルの仕事ができていいのかと考えると自信がなくなることもあります。

「サロン 2002」 との関わり

その後、サロン 2002 とは、1999 年 3 ~ 4 月に「サッカーくじについて」というタイトルで 2 回にわたって月例会で toto を取り上げていただくなど、仕事を通して個人的にも徐々に深い関係を構築してい

くこととなります。ちょうどこの頃、サロン2002では法人化について検討・議論がスタートし、2000年4月の設立宣言や、当時の規約づくりに携わらせていただきました。サロン2002のホームページには今でも「設立宣言」が掲載されていますが、改めて今読んでみても核心部分は新鮮で色あせておらず、当時から今にかけてこの精神が脈々と引き継がれてきたと思うと、こんな素晴らしいことはないと思います。

そして、2000年から2008年にかけては、サロンの会員名簿作成と会計担当として、自分なりにGive and Takeの精神でサロンと関わらせていただきました。会員名簿は一般的な五十音順の氏名だけのものではなく、サッカーやスポーツとの関わり、現在感心を持っているテーマ、自己PRなどを記載した100ページを超える冊子を毎年度作成させていただきました。また、2000年からは会費を徴収する会員制の組織としたため、会計担当として会費の徴収・督促、帳簿の作成、予算・決算報告なども行いました。年度末になると、総会に向けて会費未納の会員に対して督促を行わなければならないのですが、ちょうどその時期は仕事も多忙で、とにかく大変だったという記憶が鮮明に残っています。2009年4月には仕事の関係で岡山県に転勤することになり、その時、中塚先生からは「来る者は拒まず、去る者はときに追うや」と言われ、1年間は副担当者として引き続き関わらせていただきました。その他、初(?)の出張サロンとなった1999年7月に私の車で新潟市に出かけたことも、今ではとても良い思い出になっています。

「サロン2002」への期待

サロン2002とは長きにわたる関係を通して、改めてスポーツの楽しさ、幅の広さ、素晴らしさを自分に教えてくれたとても大切な存在です。そして、サロン2002での活動は、ある意味私にとっての青春でした。

また、サロン2002での会員名簿作りや会計担当としての経験や、様々な方々との出会いを通しての経験が、今の仕事をする上でも源になっていると思っており、とても感謝しています。

サロン2002にはこれからもしづとく、「設立宣言」の精神をこれからも次世代に継続していただき、スポーツに関わる者やスポーツを通して21世紀の「ゆたかなくらしづくり」を目指す者のプラットフォームとして、ますます存在感を発揮していただきたいと思っています。

2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会の開催

さて、ここからは私の本業についてお話をしたいと思います。

1964年に開催された東京オリンピックから50年以上の時を経た2020年に東京オリンピック・パラリンピック競技大会が開催されます。まさか自分が生きている間に自国開催が実現するなんてと思ったところですが、2013年9月のブエノスアイレスでのIOC総会で2020年大会の東京開催が決定した瞬間は記憶に新しいところです。しかし、既に開催まで残すところ3年を切っており、つくづく月日が経つのは早いと、50歳代前になると余計に時が経つ速さを感じています。

1964年の東京オリンピックは高度経済成長期の中での大会であり、そのような状況下で国民が大会の成功に向けて一体になれる大会であったのではないかと考えています。最先端の科学技術が生活の中に組み込まれ裕福で便利な世の中になり、多様性のあるこの現代社会において開催されるオリンピック・パラリンピックにおいて国民は大会成功に向けて一体になれるのでしょうか。そんなことも気にしながら、私は今、スポーツ庁の競技スポーツ課で仕事をしています。当課では国際競技力の向上のための諸施策を展開しており、私は、2012年ロンドン大会終了後の2013年4月に当課に着任にして以降、トップアスリートの強化支援に関する業務に従事してきました。2020年の東京開催が決定した2013年以降は、我が国のスポーツ界は凄まじいスピードで環境が変化しています。その状況について、競技力強化に関する取り組みを中心にご紹介したいと思います。

1964年から2020年へ

1964年の東京オリンピック競技大会は、当時の報告書を見ると関係者がありとあらゆる努力をしてきたことがよくわかり、当時の関係者の覚悟とチャレンジ精神が伝わってきて「本当に凄い!」と感じることができます。アスリートの強化に関しても、東京開催決定以降早々に5年計画を策定して、スポーツ科学を取り入れた強化を行うなど、野心的で戦略的な強化が行われたことがわかります。このようなことなどを背景に、2020年東京大会決定以降、関係者の一部は、

1964年の東京大会に立ち帰り、2020年に向けたストラテジックプランの必要性を感じていました。

2020年東京大会に向けた競技力強化の支援に関する取組

(1) オリンピックとパラリンピックの一元的な強化に向けて

2020年東京大会は、1964年東京大会と異なり、オリンピック・パラリンピック競技大会として一体的に開催されます。2020年の東京開催が決定した翌年の2014年4月には、パラリンピック競技を含む障害者スポーツの所管が厚生労働省から文部科学省に移管されました。移管された背景の一つには、パラリンピックの競技性が著しく向上し、自立支援やリハビリテーションの延長線上でのスポーツの位置付けや強化ではもはや世界と戦えない状況になっており、パラリンピック関係者自らがオリンピック競技を所管する文部科学省への所管替えを強く希望されたという背景が大きく後押ししたものと思っています。このような背景のもと、文部科学省では、これまでオリンピック競技を中心とした強化・研究活動拠点の在り方を今後どのようにするのか、その方向性を定めるために有識者会議を設置しました。文部科学省としては、今後、オリンピック競技とパラリンピック競技の強化を一体的に進めていく必要があったことから、初めてオリンピック競技とパラリンピック競技の関係者に一つのテーブルについていただき議論を行ったという歴史的な会議であったと思っています。この会議の最終報告は、2015年1月に「オリンピック競技とパラリンピック競技の一体的な拠点構築に向けて」という副題を付けて、ナショナルトレーニングセンター(NTC)の拡充整備、既存のNTCや国立スポーツ科学センター(JISS)のオリパラの共同利用化、ハイパフォーマンスセンターの構築など、2020年やそれ以降を見据えたトップアスリートにける強化・研究活動拠点の在り方の将来像をまとめていただきました。報告書の最後には次のように記してあります。「このたび取りまとめたオリンピック競技とパラリンピック競技のトップアスリートにおける強化・研究活動拠点の在り方については、2020年又は2020年以降の我が国のハイパフォーマンススポーツにおける国際競技力の向上に向けて極めて重要な要素を含んでおり、今後、関係機関それぞれが「スポーツは一つ」という理念と、「不可能」なものを「可能」にするという高い意識を持っ

て取り組むことにより、この方向性が早期に実現することを期待する。」私は、競技力強化に関しては、オリンピック、パラリンピックそれぞれの環境や状況の違いはあるけれど、健常者も障害者もオリンピックとパラリンピックという頂点の競技大会を目指して、同じトップアスリートとして強化していくべきであると考えていたので、まさにこの報告書は今後オリパラの強化を文部科学省で一元的に捉えて取り組んでいくための指南書となったと思っています。報告書の最後の言葉を、今改めて自分の心に刻み強化支援に向き合っていきたいと思っています。

(2) 強化費の一元化

2015年度には、いわゆる選手強化費が「競技力向上事業」として一元化されました。これは、これまで国による直轄事業、日本オリンピック委員会(JOC)への補助金、日本障がい者スポーツ協会(JPSA)への補助金、日本スポーツ振興センター(JSC)のスポーツ振興基金など、様々な事業によって支援が行われていた競技団体向けの選手強化費について、JSCに資金を一元化し、国において、JOC等の関係団体の知見を活用しながら、戦略性をもった強化・配分方針を策定するとともに、JSCが国の方針に基づき、競技団体への選手強化費の配分及び事業評価等を行うことにより、PDCAサイクルを強化することで、効果的な選手強化に取り組むことを目的としたものです。

(3) スポーツ庁の創設

2015年10月にはスポーツ庁が創設されました。スポーツ庁の創設は、関係者の長年の希望であったと聞いていますが、2020年東京大会の開催決定がなければ実現しなかったと思っています。初代長官は、1988年ソウルオリンピックの競泳100m背泳ぎで金メダルを獲得された鈴木大地氏が就任されました。スポーツ庁創設による目的は様々あると思いますが、競技力強化支援に関して言えば、それまでは競技力強化支援の対応、国際競技大会の対応、アンチ・ドーピングの対応、競技団体のガバナンスの対応など、多岐にわたる対応を一つの課で対応していたものを、機能的に整理することにより、一つの課が競技力強化支援の対応を限定して担うことになり、よりきめ細やかな対応が可能となったと言えます。

スポーツ行政の一元化による具体的な効果はこれからかも知れませんが、「スポーツ庁が創設されて良

かった」と思っていただけの成果が出せるよう、努力していきたいと思っています。

(4) NTCの拡充整備やハイパフォーマンスセンターの設置など、競技力強化のための環境整備

2015年1月に取りまとめられた報告書をもとに、2016年4月にはJISSとNTCの連携及びJOC・日本パラリンピック委員会(JPC)、JSCの連携を促進するために、JSCにハイパフォーマンスセンター(HPC)が設置されるとともに、5月には協働の枠組みであるHPC戦略本部が設置されました。また、NTCの拡充整備については、同年10月から基本設計を開始するとともに、2016年7月には実施設計を開始し、2017年3月からは整備工事に着手して、2020年東京大会の1年前の2019年には開所できるよう整備を進めています。既存のNTCは、もともとオリンピック競技でのメダル獲得を目的とした施設であったので、パラリンピック競技のアスリートが利用しにくい施設構造になっていましたが(現在は自動ドア化やバリアフリー化など対応済み)、NTCの拡充棟は、当初からパラリンピック競技のアスリートが利用できるように施設として整備することとしています。


(5) 競技力強化のための今後の支援方針(鈴木プラン)の策定～2020年以降を見通した強力で持続可能な支援体制の構築～

2016年10月は、東京大会に向けたスタート地点、スポーツ庁創設1周年と、我々にとっては非常に重要なタイミングでありました。リオデジャネイロ大会が終了すると、次はいよいよ東京大会というように盛り上がってくるので、リオデジャネイロ大会での日本代表選手団の成績は非常に気になるところでした。また、スポーツ庁が創設されて1年が経過し、2020年東京大会に向けた競技力強化に向けた施策を打ち出す必要があると考えていたのです。

競技力強化のための今後の支援方針(鈴木プラン)では、この目的を次のように記しています。「このプランの目的は東京大会で日本が優れた成績を収めるよう支援するだけでなく、その取り組みを強力で持続可能な支援体制として構築・継承することにある。メダル獲得が全てという考え方は適切ではないが、メダル獲得を目標・原動力とした日本のトップアスリートのひたむきな努力、試合で躍動する姿は、勝敗に関わらずこの国に活力を、国民に希望と勇気を与える素晴らしい力を持っている。その力が東京大会以降も永く

発揮されるよう、競技団体による競技力強化のプロセスを支える優れた仕組みを後世に伝えることは、競技スポーツの祭典である東京大会の開催国に創出されるにふさわしい最重要のレガシーだと私は確信する。」そして、「スポーツ関係者は、このプランを踏まえ、競技力強化とその支援の充実のためにあらゆる努力を傾注する強固な「覚悟」を持ち、それぞれの立場で「挑戦」し、成し遂げる必要がある。」としています。この部分は、1964年東京大会の当時の関係者が覚悟を持って臨んだように、2020年東京大会に向けた競技力強化に関係する者が最も共有しておかなければならない部分であると思っています。

そして、5つの具体的な施策を柱立てしていますが、2020年以降も踏まえて最も重要なのが「中長期の強化戦略プランの実効化を支援するシステムの確立」です。高度で安定した競技力強化を行うには、各競技団体が少なくとも2大会先のオリンピック・パラリンピックにおける成果を見通した中長期の強化戦略プランの策定・実践・更新を通じてシニアとジュニア(次世代)のトップアスリートの強化等を4年単位で総合的・計画的に進めることが望ましく、強化戦略プランの実効化は競技団体競技力強化ガバナンスの生命線です。このため、JSCに設置されたHPCにJOC、JPCを含めた協働チームを設置して、競技団体の強化戦略プランにおけるPDC Aサイクルの各段階で多面的にコンサルティング・モニタリングを実施し、強化戦略プランが実現するように、プランの策定段階から関係機関が一体となってサポートする体制を構築することとしています。また、単にサポートするだけでなく、協働チームが得た知見は、スポーツ庁等によるターゲットスポーツの指定や各種事業の資金配分に関する競技団体評価に活用し、過去の大会成績を加味しつつ、強化戦略プランの達成度を重視して、競技団体の「現在」や4年先、8年先の「将来」を見通した取り組みを積極評価することとしています。このような取り組み全体を一つのシステムとして確立させ、2020年までにとどまらず、2020年以降に引き続いていきたいと考えています。2017年3月には、第2期のスポーツ基本計画が策定されましたが、国際競技力の向上については、この支援方針を踏まえて策定されました。

2020年東京大会の成功は、日本代表選手団の活躍が大きな要因の一つになると思います。我々の後輩たちが、数十年後、2020年東京大会を振り返った時に、少しでも参考となるような取り組みが残せるよう最大限努力していきたいと思っています。 

プロサッカーもワールドカップ出場も 「当たり前」のBefore 20とAfter 20

春日 大樹 (筑波大学蹴球部OB)



皆様、はじめまして。筑波大学蹴球部OBの春日大樹と申します。この度、中塚理事長より、ご指名を受けまして、本寄稿を僭越ながら執筆させていただくこととなりました。演者の皆様や他寄稿者と比較し、まだまだひよっこの私ではありますが、お読みいただければ幸いです。

さて、タイトルにも致しました通り、私はJリーグの設立した1991年生まれの26歳です。そんな私にとって1993年に開幕したプロサッカーリーグの「Jリーグ」も、1998年より出場を続けているFIFAワールドカップ(以下W杯)も、当たり前前に生活にあるものです。しかしながら、本シンポジウムを通して私達「Jリーグチルドレン」が享受する日常は、諸先輩方の努力によって作り上げられてきたものであると実感いたしました。そこで本寄稿では、第1部に私達「Jリーグチルドレン」の育ってきたBefore 20を私の経験から振り返り、第2部ではこれからのAfter 20での私たちJリーグチルドレンの果たす役割を述べたいと思います。

第1部 Before 20

初めて観たJリーグ 1995年

—4歳—

私が初めてJリーグをスタジアムで観た記憶は、保育園に通うころでした。高校でサッカー部の顧問をする父の影響で、私は「ボールは蹴るもの」との教育を受けておりました。そんな父は当時名古屋グランパスを指揮していたベンゲル監督の大ファンで、私が初めて観に行った試合もグランパスであったように記憶しています。本当に小さい頃の出来事であり、私が覚えていることは試合の結果や内容ではなく、スタジアムが寒かったことです。しかしながら今振り返って考えますと、ベンゲル監督がベンチにおり、ピクシーがピッチに躍動する試合であったにも関わらず、なぜ

覚えていないのかと自分が信じられません。この様に、当時の私はまだサッカーの面白さも何も分からないちびっこでありました。

なお、この2年後1997年に「サロン2002」として活動がはじまりますが、私の父もこのサロン2002のメンバーであり、私をサロン2002に紹介してくれました。こちらについては後述いたします。

教室で観たW杯 2002年日韓W杯
—小学校5年生—

「ピクシーグランパス」ではサッカーの面白さに気付かなかった私にとっても、2002年に開催された日韓共催W杯は本当に衝撃的であり、印象に残っています。私の小学校の教室には天井にテレビが備え付けられていましたが、これを勝手につけることは勿論、授業でも殆ど使うことがありませんでした。しかし、W杯が行われている期間にこのテレビを付けてチュニジア戦やゴールハイライトの番組を観ることができました。また、鈴木選手が足を伸ばし切って決めたゴールシーンの写真が載った新聞を学校へ持っていくと、一緒にサッカーをしていなかった友達まで「これ知ってる!」と盛り上がったことを覚えています。

サロン2002のBefore 20に関われた皆様にとって、2002年日韓W杯は「ここまで日本サッカーが発展してきたのか」と成長を感じられるものである反面、私達「Jリーグチルドレン」にとっては「サッカーにはこんなパワーがあるのか」とサッカーのチカラに気付かされる出来事でありました。そして、2002年を境に私はサッカーの面白さに気が始めました。

私の人生の分岐点 2006年ドイツW杯
—中学3年生—

2002年のW杯を境に、私(そして多くのJリーグ



チルドレン)はサッカーにのめり込んでいきました。特に2004年に中学校に入学すると「部活動」が始まり、毎日大好きなサッカーができるようになりました。蛇足ですが、当時サッカー部は「彼氏にしたい部活動」で野球など他のスポーツを抑えて堂々の1位であったかと思えます。(なお本寄稿執筆にあたり、再度調べてみたところ、現在は僅差でバスケ部に1位を譲っておりました。)

当時の私はサッカーが人生の全てであり、放課後は勿論、週末も夏休みもサッカーに明け暮れました。また、サッカーをプレーするだけでなく、通学の電車の中では「サッカーダイジェスト」を隅から隅まで読み、文字通り「サッカー馬鹿」であったように思います。特に海外のサッカーに関心が出て来た時期であり、私はバルセロナのロナウジーニョが好きで、学校の調べ物学習の時間に、こっそりYoutubeで彼のプレー集を観たりしていました。

そんな中学時代に開催されたW杯が2006年のドイツ大会でした。当時の日本代表はジーコ監督の元、中田英寿、中村俊介、小野伸二、高原直泰、中澤祐二、そしてキャプテンが宮本恒靖…と非常に華のあるメンバーであり、私にとっての「日本代表」は今でもこのチームであります。また、当時「新黄金のカル

テット(ロナウド、ロナウジーニョ、アドリアーノ、カカ)」擁するブラジル代表から玉田圭二の奪ったゴールは今でもはっきりと覚えています。

しかし、それ以上に私を惹き付けたものはW杯の開催国であったドイツでした。テレビから伝わるスタジアムの雰囲気はJリーグのそれとは全く異なり、中学生の僕には本当にカッコよく、ドイツに行きたい、ドイツでサッカーをしたいと思うようになりました。W杯がきっかけとなり、筑波大学への進学、更には在学中のドイツ留学へと繋がっていきました。

筑波大学進学 サロン 2002 との出会い —2010年大学入学から2016年卒業まで—

2010年南アフリカW杯の年、私は地元を離れ筑波大学蹴球部へ入部しました。同期には谷口彰吾(川崎)、赤崎秀平(ガンバ)、上村岬、玉城俊吾(ともに今治)がおり、監督は風間監督(名古屋)でした。

蹴球部では最初の3カ月間、1年生のみで練習する通称「フレッシュマンコース」と呼ばれる仮入部期間が設けられています。この期間は先輩に指導を受けながらの厳しいトレーニング(朝練のみ)と合わせて、筑波大学蹴球部の歴史や文化を学ぶ期間でもありま

す。そしてその導入で行われる1週間の合宿での講義にて、中塚理事長と出会いました。

中塚理事長は講師として、嘉納治五郎先生からはじまり中村覚之助さん、坪井玄道先生などの筑波大学、そして蹴球部の歴史をものすごい熱量と想いで語っておられました。しかし、5時起きで練習し、夕方まで大学の授業に出た後の私には、疲労と睡魔もありその中塚理事長の熱意についていけなかったことを記憶しております。今思い返すと、当時の私にとってサッカーはまだ「プレーする」ものであり、今回のシンポジウムで取り上げられているような、如何にサッカーが発展し、そこには多くの人達が関わっているということなど考えていませんでした。

その後2012年には、念願であったドイツ留学を果たし現地のアマチュアチームで1年間プレーをする機会にも恵まれました。翌年2013年に「海外組」として帰国し、大学4年の最後のシーズンを戦い、選手活動に一つの区切りをつけました。この頃、少年サッカーの指導という場はありましたが、これまで続けてきたサッカーに「何か」還元できないか考えるようになりました。そんな中、先に述べた私の父が私に「サロン2002」を紹介してくれました。私の父と中塚理事長、島崎理事は全国高体連の業務とともに仕事をした経験があり、その繋がりから一足早くサロンのメンバーになっておりました。そんな父から「自分の代わりに月例会に出てほしい」との要望を受け、参加したことがサロン2002と私の出会いになりました。

サロン2002での出会いは、今までサッカーを「プレーする」ことしか知らなかった私に様々な新しい知見を授け、様々な可能性を考えるきっかけとなりました。そして、ここまでサッカーを発展させてくださった人たちへの「感謝」と今後の発展に貢献しないといけないという「サッカー人」としての自覚が芽生えたように思います。

第2部 After 20

ここまで、お読みいただきましたのはJリーグ誕生の頃に生まれた私のこれまでのサッカーの関わりであります。出来事は個人的なことではありますが、同世代のサッカー少年、少女にとってはリンクする部分も多くあるかと思っております。

本稿では、現在のサッカーが私たちにとってどういったものであるかを出発点に、After 20のサッカー

発展に向けた私の考えを述べたいと思います。

Jリーグチルドレンにとってのサッカーとは

91年生まれ以降の私たちにとって、JリーグやW杯出場が「当たり前にあるもの」となっていることは既に述べたとおりです。しかしながら、「当たり前にあるもの」と「関心が非常に高いもの」との間には大きな隔たりがあるように感じています。

私が大学1年次だった2010年には、既に述べた通り南アフリカ大会がありました。しかし、この世紀の大イベントを前にしても私の所属する文学部の学生の多くは興味を持っていないように感じました。仮にこのW杯が日本にとって初めて出場する大会であったとしたら、もう少し試合を観る人が多くなったとも考えられます。W杯が「当たり前」になったことでW杯を観る人が減っているのかもしれませんが。

同時にサッカーをしている蹴球部の中でも、サッカーをよく観る人と全く観ない人に分かれています。ドイツで私のいたチームでは、各々が最良にしているチームが必ずあり、その試合はチェックしている前提のもとコミュニケーションが図られていました。サッカーを「やる派」と「観る派」に分かれているのも日本の特徴のように感じます。こうした現象は、サッカーをする、観るといったことが私たちにとっての娯楽のひとつとして定着していることの証明であるともいえると考えます。複数ある娯楽のうちのひとつであり、それを選ぶ人もいれば選ばない人もいるといった状況であるかと思えます。

では、娯楽としてサッカーを選択した人にとってサッカーはどういったものになるのでしょうか。私はサッカーが私たちにとってファッション化していると感じています。これはとりわけ海外サッカーファンの日本人に見られる傾向のように感じます。東京や大阪などのスポーツバーに行くと、海外のチームのユニフォームを着用し、お酒を飲みながら試合を観ています。この景色はヨーロッパの街角で観られるものとなんら変わらないようにも映りますが、私はそのチームを応援する根底にあるメンタリティーに大きな違いがあると感じています。

例えば私の滞在したドイツのボンという街には大迫の所属する1.FCケルンのサポーターが多く住んでいました。私の留学した2012年には、ケルンと私の応援しているガンバ大阪が共に2部へ降格するという出来事がありました。この話をした際、彼らは私を「同

じ苦しみを体験した同志」といった様子でその悔しさをすごい勢いで話だし、私は圧倒されたことを覚えています。彼らにとって応援しているクラブは自身の体の一部であるように感じます。こうした類の熱量を日本ではまだ感じたことが私はありません。

また、海外では複数のチームを応援するといった感覚はないように感じます。私が「(ブンデスリーガにいる)日本人選手のチームを応援する」といった話をした際、彼らは一様に理解できないといった顔をしていました(当時内田のいたシャルケ04と香川のいたドルトムントというライバルチーム両方を応援するなどあり得ない事だからです)。彼らにとって自身の応援するクラブは自身の体と同じく唯一無二のものであるように感じます。対して日本では自分の地元のJリーグのチームと一緒に(あるいはそれ以上に)バルセロナやレアルマドリードが好きな人も多いと思いますし、「プレミアリーグならアーセナルが好き、ブンデスリーガならバイエルンが好き」といったようにリーグ毎に応援するチームがあるといった方も珍しくないように感じます。

この様に、私たち世代の日本のサッカーファンは海外のサッカーファンと異なり、どちらかと言うと音楽アーティストやアイドルのファンに近いものがあると感じています。これは先に述べたようにサッカーが日本では娯楽のひとつとして地位を確立し、他の娯楽である音楽などと同様に扱われているからであると考えます。この点について、本シンポジウムに参加されました皆様のBefore 20によって創り上げられたひとつの大きな成果であると考えます。それを引き継ぐ我々は次のAfter 20において、サッカーというコンテンツをより多くの人に選んでもらえるようにするというタスクがあると考えます。そのために、今までと違ったアプローチによって、例えば同じスポーツである野球よりも、あるいは他の分野である音楽ライブよりもサッカーが魅力的であることを伝えなければなりません。そして、そのアイデアを出すことが私たちの役目であると考えます。

サッカー×αの可能性

After 20でサッカーを今まで以上に盛り上げていくためには、スポーツに様々なものを掛け合わせていくことが必要であると考えます。

まず思いつくものとして、人と人とのコミュニティーを作り出すツールにサッカーを用いるという方

法です。サッカーは参加者全員がひとつのコートに入ってプレーします。また、年齢や性別が違っていても一緒に参加することができます。この点が他のスポーツにない良さであり、コミュニケーションを図る際に非常に力を発揮すると思います。更に最近はフットサルコートが増え、手軽にボールを蹴ることを楽しめるようになってきました。そのため、フットサルをする人には、私のようにサッカーを学生時代からやっていない人も多いです。

私が現在住んでいる京都では「サッカーを通じた交流会」といった活動が多く行われています。参加者は月に一度サッカーを楽しむために集まり、真剣に試合をするというよりは「みんなで楽しく」をコンセプトにボールを蹴っています。私も始めは全く知らない人たちがばかりでしたが、通っているうちに友人が増えていきました。こういった活動は全国に広がっていくように感じます。

しかしサッカー交流会というわかりやすい形だけではなく、より多くの人にサッカーの魅力を伝えるためには他の可能性についても考えなければならないとも考えています。例えば、サッカークラブがクラブのロゴの入ったお洒落なアパレルショップを開いてもいいと思います。11月のサロン2002月例会では、漫画について扱ったとのことでしたが、会場で配るマッチデープログラムを全て漫画で作ってみても面白いかもしれません。

これらのアイデアはBefore 20ではもしかすると考えられなかったものかもしれません。しかし、サッカーを当たり前にし、W杯を観てきた私たちが新しい可能性を示すことでよりサッカーを発展させていく事が出来ればと思っております。AIやIoTなど新たなイノベーションが生じている現代社会の中で、サッカーに新たなイノベーションを起こすことが私たち「Jリーグチルドレン」の果たす使命であると考えます。そして私自身、そこへ少しでも貢献出来よう精進して参ります。

最後になりましたが、この様な場を提供していただきました中塚理事長を始めとするサロン2002理事、事務局の皆様へ感謝を込めて、本稿の結びとさせていただきます。



REAL FUTSAL SHOP



www.roda.jp

GMSS

GMSS ヒューマンラボ

Institute of Global Medical and Sports Science Japan, Inc.

**すべての人に
ゆたかなくらしを**

www.gmss.jp